

薰風52号
創部80周年特集号

全日本学生ワンダーフォーゲル聯盟（四大学聯盟ワンデルング）



昭和15年10月27日 高松山頂上

浅間山を指差すWV班長



昭和15年11月1日 峰の茶屋



昭和14年9月 三八式歩兵銃を担いだ仲間
戦時体制下、必須科目の教練で習志野兵舎に
四泊五日で配属将校指導のもと、厳しい演習
に参加した。

大島義郎 寄せ書き日章旗
BN. 69 昭和16年商

春日井薫部長（当時41歳）とMWV卒業生



昭和16年12月繰り上げ卒業

リーダー養成 ゴキタ沢源頭



平成27年8月5日

北海道夏合宿 羅臼岳



平成27年8/31～9/13

全国一斉「オールなため会」ワンデルング



NO. 1 谷川岳：群馬県



NO. 2 皇居周辺：東京都



NO. 3 高尾山：東京都



NO. 4 伊豆ヶ岳：埼玉県



NO. 5 秋田駒ヶ岳：秋田県



NO. 6 角田山：新潟県



NO. 7 鋸山：千葉県



NO. 9 矢倉岳：神奈川県 (MWV & なため会ジョイントW)



NO. 10 吉野ヶ里遺跡周辺：佐賀県



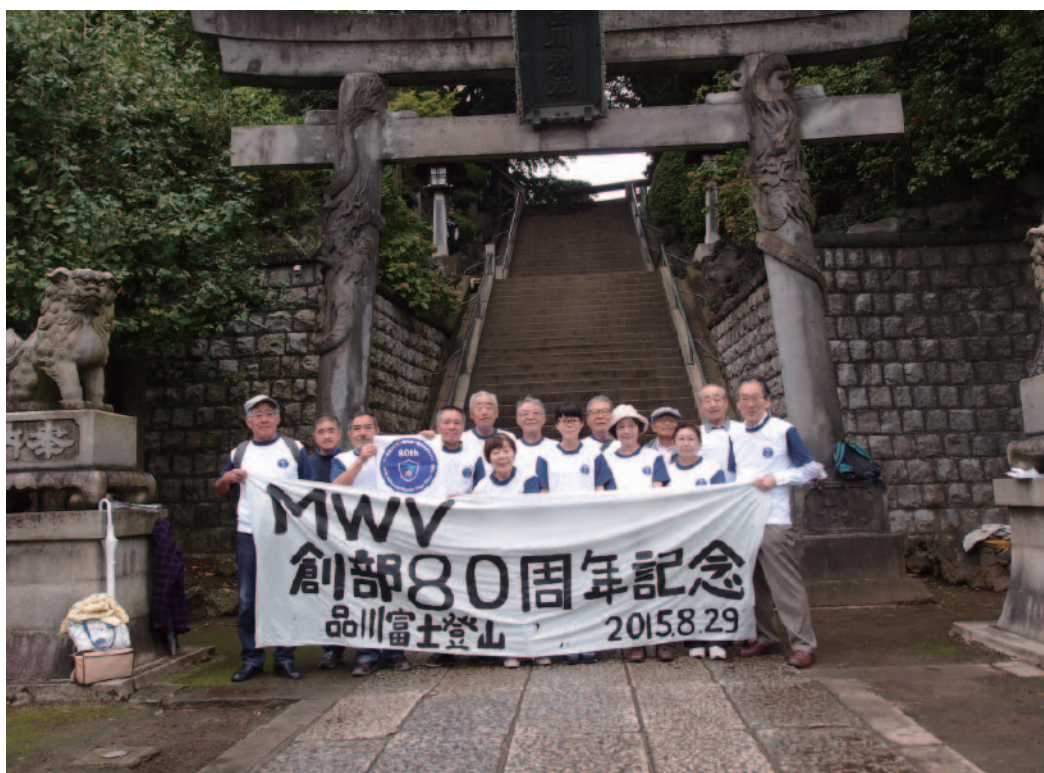
NO. 11 蒜山高原：岡山県



NO. 12 多良岳周辺：長崎県



NO. 13 草津温泉 芳ヶ平：群馬県



NO.14 東海道品川宿：東京都



NO.15 金峰山：山梨県



薫風52号 創部80周年特集号 目次

創部八十周年に思う	なため会会長	BN 532	鈴木 正彦	三	全国一斉「オールなため会」ワンデルング	BN 795	濱田 稔	一三
ワンダーフォーゲル部創部八十周年を祝う	部長	長峰 章	三		NO. 一 谷川岳…群馬県			
					NO. 二 皇居周辺…東京都			
					NO. 三 高尾山…東京都			
創部八十周年にあたって	監督	諏訪本充弘	四		NO. 四 秩父・伊豆ヶ岳…埼玉県			
					NO. 五 秋田駒ヶ岳…秋田県			
主将挨拶	主将	松田彩友美	四		NO. 六 角田山…新潟県			
					NO. 七 鋸山…千葉県			
なために憶う	BN 197	小林 碧	五		NO. 八 鈴鹿御在所岳…三重県			
					NO. 九 矢倉岳…神奈川県			
明治大学から始まった学生ワンダーフォーゲル		城島 紀夫	六		NO. 十 吉野ヶ里遺跡周辺…佐賀県			
					NO. 十一 蒜山高原…岡山県			
昔を想い今への願い	BN 120	鈴木善次郎	九		NO. 十三 草津温泉芳ヶ平…群馬県			
					NO. 十四 東海道品川宿…東京都			
戦中・戦後のWV	BN 181	新村 貞男	一〇		NO. 十五 金峰山…山梨県			
					カスケード山…カナダ	BN 676	野島 一雄	三三
春日井先生から、教えて頂いた事	BN 301	小宮 盛治	一一		私とワンダーフォーゲル	BN 683	横手 一男	三四

年間行事予定	平成28年度現役指導スタッフ紹介	新執行部紹介	平成二十八年 なため会ワンデルング日程	WV三六会の近況報告	二〇一五年十一月 草津訪問記	高山植物の宝庫を巡る	北アルプスく白馬・雪倉・朝日	矢倉岳でインタビューしました	空色椎橋会長との最初の山行	椎橋稔君千週連続登山おめでとう	椎橋OBの千週連続登山についての考察
四三	四三	四二	四二	BN 425	BN 1017	BN 775			BN 705	BN 501	BN 477
				長井 吾一	山口 直樹	小田野義之			杉山 裕	前田 芳弘	天野 俣明
				四一	四〇	三九		三八	三八	三七	三七
					年表	編集後記	お詫び	訃報	平成27年度卒業生歓送迎会のお知らせ	主務連絡先	山小屋の利用を希望する方へ
					四七	四三	四三	四三	四三	四三	四三



題字 廉隅 進

創部八十周年に思う

なため会会長 鈴木 正彦
BN 532 (昭和三十九年経営)

我が明治大学体育会ワンダーフォーゲル部が創部以来、80周年を迎えることができたことを心から喜ぶ次第です。

創部された時代の世相は、昭和十一年(一九三六年)に二・二六事件があり、ベルリン五輪の二百M平泳ぎで前畑秀子の優勝がありました。また東北地方は大凶作で、娘たちの身売りが激増した時代でした。この頃の平均寿命は、男性四四・八歳、女性四六・五歳でした。翌十二年には上海事変が勃発、次第に重苦しい時代へと進んでいったのです。

そのような中でMWWは産声を上げた訳ですが、第二次世界大戦終盤の昭和十八年(一九四三年)には兵力不足を補うため、学徒出陣が始まりました。

昔のOB名簿には、死亡理由に「戦死」と

薫風52号
創部80周年特集号
明治大学体育会
ワンダーフォーゲル部
なため会会報

いう先輩たちが何人も見受けられました。
そのような時代の変遷を経て今日のMWWがあります。戦死された先輩たちのご冥福を祈るとともに、MWWの礎を築かれた諸先輩に心より敬意を表します。

今、私の手元に「ワンダーフォーゲル年鑑」一九六二―全日本学生ワンダーフォーゲル連盟があります。この冊子は、全日本学生ワンダーフォーゲル連盟が出来て三年の歳月が過ぎ、加盟校が六十校となり第三号として発行されました。

「加盟校がお互いに助け合い、より深く知り合い、最高学府に学ぶ学生として、行動と理論の伴ったワンダーフォーゲル運動を行って戴ければ幸いです。ワンダーフォーゲル運動が、我が国において自然への憧れの気持ちを持つて国土を遍歴することによって始められてから三十余年、戦後益々若人の自然への憧れを反映して、次第に大きな運動へと発展し、世に浸透してきました。全国のワンダーラーよ！手に手を取ってお互いにかばい合いながら、より広く明日の大空に向かって羽ばたこうではないか！」とあります。

現在、連盟は機能していないようですが、私はこの連盟の仲間たちと今でも一緒に山に登ったり、酒を酌み交わしたりしています。仲間には元全日本学生ワンダーフォーゲル連

盟委員長や各大学OB会の会長もいます。MWWの今年度の執行部は、主将・主務ともに女性ですが、KWV(慶応)やMGWV(明学)も女性が主将だそうです。
ドイツのメルケル首相、韓国の朴槿恵大統領、ヒラリー・クリントン達も女性リーダーとして活躍し、女性の時代を痛感します。男子学生諸君！頑張ってください。

ワンダーフォーゲル部

創部八十周年を祝う

部長 長峰 章

ワンダーフォーゲル部創部八十周年おめでとうございます。創部八十周年を迎えられたのも、ひとえにWV部OB、OGの皆様の現役時代からの努力と協力の賜物と心から感謝申し上げます。また、この間にWV部の運営に携わってきた監督、コーチの方々にもこれまでのご尽力に対して御礼の言葉を述べさせていただきます。

ワンダーフォーゲル部は、春日井薫先生に部の前身である「駿台あるこう会」を改組してワンダーフォーゲル部を立ち上げて頂きました。最初の学生委員長を務め、後に初代監督に就任された三本鳴美氏の回顧録によると、創部当初から部の綱領とバックル授与の制度が設けられ、部員数は23名であったと記されています。

WV部創設後の我がワンダーフォーゲル部の活躍ぶりは、皆様が良くご存知の事と思いますが、毎年発行されてきた部誌に残されている長きにわたる輝かしい活動歴を読ませて頂くと、明治大学のワンダーフォーゲル部は日本一のクラブであると断言できると思います。

私は二十年以上に渡りワンダーフォーゲル部の部長をさせて頂いており、夏合宿には毎年のように参加させて頂いています。部長冥利に尽きますが、北海道と九州での夏合宿には何度も参加させて頂き、四国、東北、北陸の地にも行かせて頂きました。部の綱領のように国土を遍歴して、美しき自然に親しむことを実践させて頂いています。

ワンダーフォーゲル部は今後創部九十周年、百周年を迎えることになると思います。WV部OB、OGの皆様にはWV部が今後ますます、すばらしいクラブになっていくように御協力の程よろしく願います。

私もワンダーフォーゲル部の未来に栄光あることを祈念させて頂きます。

創部八十周年にあたって

監督 諏訪本充弘（昭和四十九年文）

私が入部したのが昭和四十六年で、その時から数えて四四年。そうかクラブの半分以上の歴史を知っているんだ、と自画自賛したもの

の知っているのは現役時代の四年と最近の十年くらいで、その他のことはもっぱら城島紀夫先生の著書が頼りといういささか歴史には疎いありさまですが、私が入部した当時はワンダーフォーゲルの知名度は良きにしろ悪しきにしろ、誰もが知っている存在だったと思われるますが、最近の入学生は知らないというのがほとんどで、なんとかいい意味で知ってもらおうと思っております。そのためには一人でも多くのワンダーを送り出すのが使命だところえております。

私どものクラブは他の体育会のクラブとちがって、競技部ではないので、評価は他の人々が見て、一見つらそうなことをいともあたりまえに和氣藹藹としつかりしたリーダーのもとでやるというのが一つの目標だともいいます。したがって、私の指導方針はいたって簡単で「あたりまえのことを、あたりまえにする」というものです。挨拶はしっかりとする。装備は丁寧に使う。部誌は期限までに発行する。合宿の記録はすみやかに提出する。天気図は放送が終わったら十分以内に仕上げる。そしてなにより大切な経験を積み重ねるために積極的に企画を立て季節に応じたワンディングをする。

これらのことを明るく楽しくやっていってほしいというのが一貫した方針です。

いまだ道半ばですが、大学当局、OB諸兄のお力をかりながら、部長先生、コーチともども、執行部を叱咤激励してすこしずつでも

いい方向にしていきたいとおもっております。

主将挨拶

主将 松田彩友美（四年部員 農）

今年度で明治大学ワンダーフォーゲル部（ワンゲル）は創部八十年となり明治大学の中でも歴史ある部活です。それだけではなく、多くの大学ワンダーフォーゲルの中でも最も歴史ある部活でもあります。ワンゲルは登山を行う部活ですが、山岳部とは異なり体力の限界への挑戦や未知の世界への探求はしません。では、何をしているのかというと登山を通して、当たり前なことである時間を守ることで、他人を思いやること、協力することが出来るような部員を育てる部活だと思っています。これらが出来ようになることに加えて自然に親しみ、その良さをわかることが出来たならば立派なワンゲル部員なのだと思います。

そんな歴史ある部活で主将を務めることへの緊張を持つとともに、男子部員の多い部活で主将の私が女性であることに不安も感じています。けれども、主将とは自分自身の能力が優れているのが必須条件ではなく、周りのワンゲル関係者の協力をへてまとめていくことができる人でも務めていけると思っていますのでそういった主将を目指していきたいと思っています。

現在、ワンゲルの活動は主に年間六回の合宿を二泊三日で行っています。そのうち、夏合宿では約二週間かけて遠く北海道、東北、四国、九州など日本各地で行っています。卒業された多くの先輩方の現役のころのワンゲルとは同じ部分もあり、異なる部分もあると思います。装備などは改良が進んでいて全く違うものとなっているものもあります。けれども、自然に親しみ、仲間と友好を深めるワンゲルのあり方は大きくは変わらないのではないのでしょうか。

最後になりましたが八十年という長い間に卒業されたたくさんの諸先輩方や監督・コーチ、関係する方々にはワンゲルがこれから活動が続けていくために暖かく見守っていただきたいと思います。

なために憶う

BN 197 小林 碧 (昭和二十六年商)

私の手許に一丁の鉈が残っています。戦後間もない頃、尾瀬へ出かけての帰り鎌田の鍛冶屋で見つけて手に入れたものです。刃もとの厚みと言ひ刀先からのくびれた柄へかけての角度と言ひ典型的な山刀で、それ以来私の山行に欠かせないものとなりました。

桜の皮でとち合せた木のさやに赤石岳の焼印が残って居るのは二八年夏の南アルプス縦走の折の記念です。少々刃こぼれはあるもの

の未だ鋭い光を失って居ません。

その黒びかりした柄を握りしめて居ると若かった頃の幾多の山行がほんの昨日の様に懐かしく思い出されます。その頃のワンデルングに鉈は必携品でした。誰のキスリングのタツシユにも鉈の柄がのぞいていたものです。炊事用具として勿論でしたが、未だ山々は荒れ放題でしたし、気持ちの荒んだ物騒な連中が山へ入り込んでいましたから、それに見通の利かない深いヤブ漕ぎを強いられた時など、切れ味のよい鉈程頼りになるものはありませんでした。

一日中雨にたたかれて、夕暮れ近く辿りついた火の気のない山小屋で濡れ通ったヤツケや衣類を乾かす焚火を手早くおこすのにも鉈の切れ味がものを云いました。あの頃は今の様に携帯に便利な折りたたみ傘や防水の良く利くビニールなどありませんでした。しかし苦勞して起こした焚火に暖まりながら沁々とした語らい過ぐす一刻は、大自然の荘厳な一刻、華麗な雲海の日の出にも劣らない、山でしか味はふ事の出来ない体験として何時までも胸にのこる貴重なものだと思つて居ます。山の中の生活で火を焚くことは最も重要な仕事でした。そのための鉈は最も大切な道具で常に身近に置いたものです。その鉈で刻みつけた道しるべが鉈目です。以前は深い樺や樺の樹林帯へ入ると太い幹に点々と打たれて居て単独行の折などは殊に鉈目に依つて心をはげまされ、元気づけられることが度々でした。

た。指導標の完備したコースには最早鉈目など必要としない。ケルンに替つて赤ペンキ矢じるし、崩れかけたケルンをもう積み足すこともない……だが立派に整備され観光ルート化したコースを都会の延長のような気持ちで辿つて帰ってくる。そんな登山、ワンデルングには本来の意味は薄れてしまっている様に思われるし、またあまりに完備した近代的な装備も山行を楽しむ物にはするだろうが矢張り本来の登山の目指すものから遠く離れて行く様な気がしてならない。自由に森の樹々から薪をとり出すことすら許されなくなつた。今、このような注文は無理なのかも知れない。しかし、この精神だけはわすれないで居て欲しいものである。既成のルートにとらわれない若者達の自由なワンデルング、大自然の中に身も心も溶け込んで若人の清新な気概を鍛え培う、これこそワンダーフォーゲルの目指すものだから。こんなワンダーフォーゲル精神につながるものとして鉈目の歌が生まれたのでした。歌詞はごく自然にあるが儘を表現したもので、三十三年の部誌十四号に載つて居ます。私が参加した白山の夏季合宿のコンパで初めて独り歌つたのを憶えています。作符は正確には出来ませんが簡単なハ長調でギターのよつて記譜したものです。其の後いろいろの歌集に掲載され専門の方々が正確なものに整理されて来ましたが、曲そのものは変わつて居りません。そもそも、私は部員、たつた頃読んだ資料で二〇世紀初頭の独逸のワン

ダーフオーゲル達がツブガイゲンハンスル（愛称ギター野郎）と呼ばれる歌集を育てて居た事を知り、少なからず興味を引かれて居ました。それで亡くられた木下部長が渡独された折、それを探し出して持ち帰る様御願ひしていたのですが、先生が旅先で交通事故に遭われ病院生活が長引き、それどころでは無く帰国されてしまわれ大変残念に思った事でした。私は常々ワンダーフオーゲルの歌集は自分たちの手で育てるべきだと言って来ましたが、「鈍目の歌」に続いて「旅鳥」を翌年に作って居ます。ワンダーフオーゲルにふさわしい、清新な若者らしい歌が後につづく事を期待してのことでしたが、未だにそれがかなえられないで居るのは寂しいことです。

（部歌）なため 作詞・作曲者

明治大学から始まった 学生ワンダーフオーゲル

城島紀夫

起源は明治大学

学生ワンダーフオーゲルの起源は、名実ともに明治大学体育会ワンダーフオーゲル部であります。

WV部のOB諸氏は先刻ご承知のことと思いますが、八〇年の歴史を誇りあるものとして更なる伝統を積み重ねてゆくためのよすがとして、改めてその事実を明らかにしておき

たいと思います。

それぞれの詳しい内容については、文末に記した拙著『ワンダーフオーゲルのあゆみ』に書きましたので参照してください。

起源となった事績の数々

一、「明治大学ワンダーフオーゲル部」には前身がありました。商学部春日井薫助教授が始めた「駿台あるこう会」です。

一九二八（昭和三）年に同助教授が創設して、学生を集めて毎週のように東京近郊の山などを歩き続けていた会です。

このように本を正せば、学生ワンダーフオーゲルの起源は駿台歩あるこう会にあり、この元祖は春日井薫氏だったのです。

二、一九三六（昭和一一）年に、右の「駿台あるこう会」を母体として、「ワンダーフオーゲル部」が創部されたのです。学生委員長を置いて組織化し、他の運動部と同様に学友会に加盟し、部の綱領を掲げ部活動の目標を定めました。

これが、創部の起源となっています。

春日井教授が部長として引き続き部の育成を続けられました。

同教授が英国留学中に学んだ自主・独立の精神は、戦前・戦中を通じて明治大学WV部の背骨となり、後継者たちがWV部の伝統を育んできたのです。

三、戦前の一九三五年にあった立教大学WV部と慶應義塾WV部は、「勤労者（社会人）」

の歩行運動団体・奨健会ワンダーフオーゲル部の行事に参加していたYMCA学生会員が、奨健会の出口林次郎主事の指導を得て創部したものでした。両部共に文化団体に加入し、出口主事を顧問に迎えました。

四、この後に、明治大学出身であった出口主事が春日井教授にWV部の設立を勧めたことが、駿台歩あるこう会を改名・改組した切っ掛けだったのです。

しかし出口主事と春日井教授とは、理想とするところに大きな相違がありました。

勤労者の歩行運動を推進する運動家と、エリートスポーツ育成を目指す教育者との違いです。出口主事は、明治大学WV部の活動に関わることはありませんでした。

五、太平洋戦争終結後の一九四六年に、明治大学WV部が最初に復活しました。春日井教授の督励による復活でした。

体育会への加盟を果たし、山岳部と並んで登山活動を行うスポーツの新しい種目としてわが国で初めて公認されたのです。

この公認は、実力者であった春日井商学部長の力添えによるものであったと考えられます。

国立大学における体育会（運動会）への加盟は東京大学が先導しました。加盟は困難を極めたようですが、WV部長であった大内力教授（後に東大副総長）の強力な支援があったといわれています。

私立の明治大学と、国立の東京大学が先

例となって後続の大学WV部は、スポーツの一種目として体育会に加盟することが通例となりました。

六、慶應義塾、立教、中央（体育会）とWV部の設立が続き、一九四八年に結成された全日本学生ワンダーフォーゲル連盟の委員長は、初代から三代目までを明治大学WV部が受け持ち、登山活動を主体とする学生ワンダーフォーゲル活動を主導したのです。四代目は中央大学が担当しました。

七、一九四九年に、新制大学において体育実技が必修化されることになりました。

最初に明治大学においてワンダーフォーゲル活動が体育実技の正式課題として認定され、WV部の関係者が学生の単位取得のための実技指導を担当しました。

八、ワンダーフォーゲルをユースホステル（YH）に吸収合併させるという案が、YH協会側から各校のWV連盟委員を通じて提議されました。一九五二年頃のことです。

春日井教授の大学の自主独立精神を反映した明治大学WV部の主導によって、この案は立ち消えになりました。

大学生たちが、政府が推進する青少年育成運動との間に明確な一線を画したものであり、連盟の中でも東京大学WV部は同様の精神のもとに反対の態度を表明しました。九、創部以来の春日井部長が主導を続けていた自主独立を中心とする理念は、連盟活動などを通じて全国大学のWV部に拡がって

ゆきました。

春日井教授は、教育に国家権力が介入することを嫌った英国の気風を身に付けており、青少年育成などの国の施策からは距離を置いていたのです。

明治大学WV部が私立大学ながらワンダーフォーゲル活動の主導的な立場にあったのは、このような明確な理念に支えられた伝統を持っていたからだと考えられます。一〇、明治大学ワンダーフォーゲル部が独自の山小屋を建設したことは、登山史の上での快挙となりました。

創部から四年後の一九四〇年から建設基金積み立てが始められ、戦後の一九五四年に小屋が完成しました。

大学から約半額の建設資金の拠出を得て、完成と同時に大学に寄託したのです。

これが先例となつて、ほぼすべての学生WV部が山岳部とは別に山小屋を持つという歴史が作られたのです。

ワンダーフォーゲルの父・春日井教授

わが国における学生ワンダーフォーゲルの生みの親であり育ての親は、春日井教授（一九〇〇～一九八一）でありました。

貨幣・金融論の研究者であり、私立大学が認可され始めた当時の私立振興に情熱を注いで、強い指導力のもとに母校発展のために実力を発揮した教育者でした。

併せて、四〇年間（二九～六九歳）にわたつ

て明治大学WV部の育成にも情熱を注ぎ続けた功労者だったのです。

先に挙げた実績の数々のほかに、明治大学WV部が始祖となつたWV活動は、夏期合宿指導要綱、リーダー養成合宿、班別制度、四大合ワシ、コーチ制度などが挙げられると思います。

これらは、春日井教授の薫陶を受けた後続のOB諸氏が創始して育て上げたものが多く、明治大学WV部ならびに学生WVの伝統として受け継がれてきました。

木下勇部長、三本鳴美監督、鈴木善次郎監督たちが活躍した時期は、学生ワンダーフォーゲルが大発展を遂げた時代に当たります。

春日井教授のWV関係履歴

春日井教授が活躍した時代は、初めて私立大学として認可された各校が帝国大学に対抗する個性の確立に邁進していた時期でした。

春日井教授が卒業した当時は、明治大学商学科は一橋大学を中心とする官学出身の教授で占められており、母校出身のスタッフが一日も早く育つことが囑望されていた時代でした。

一九二〇年 私立・明治大学認可、校歌誕生
一九二一年 商科を卒業し講師、助教授
一九二三年（二四歳）母校の選抜留学生として米国シカゴ大学大学院へ

翌年に英国ケンブリッジ大学に

入学

一九二六年 帰国して助教

一九二七年 商学部に初の演習制度（ゼミ）を創設

一九二八年（二九歳）商学部教授に駿台ある

一九二九年 こう会を創設・主宰

一九三〇年 ラグビー部長

一九三二年（三三歳）ゴルフ部部長、

こう会を継続して主宰

一九三六年（三七歳）ワンダーフォーゲル部を創設（駿台あるこう会を母体）して部長に

一九四九年（五〇歳）商学部長

WV部部長を辞して顧問となる

一九六八年（六九歳）明治大学大学院長

WV部顧問を退任

登山の分化を先導した春日井教授

戦前の旧制高等学校や旧制大学の山岳部は、古い時代には遠足部や旅行部として発足して登山活動をしていたのですが、一九二〇年代あたりに西欧から移入された雪と氷の山に挑戦する登山に憧れた一部の登山家たちが、「より高くより困難を」という思潮（アルピニズム）で学生山岳部や日本山岳会を染めていったのです。

学生山岳部の部員の中にはわが国古来の山に親しむ登山を望む者もいたのですが、山岳部から分化することはなかったのです。

春日井教授は、英国のアマチュアリズムに

根差すスポーツ精神の持ち主であり、母校のラグビー部やゴルフ部などの部長を務めて学生スポーツの振興に尽力されました。

英国留学中は、毎日曜日には欠かさずウォーキングに出掛けていたそうです。山岳部の部報に同教授の次のような文章があります。

「三河（現・豊田市）の田舎の、それも海抜やがて三千尺（約九〇〇メートル・筆者註）近い山の中で生まれて、其処で育った私には平地の景色は凡て何となく間が抜けて物足らぬ」、「やっぱり神気ひしひしと迫る山中の生活がなつかしくてならぬ」という山国に生まれ育った日本人らしい伝統的な登山観です。

教授は、ワンダーフォーゲル部を創設することによって山岳部の分化をはかり、アルピニズムなどの先鋭的な登山を、日本の伝統的な登山に回帰させた功労者だったのです。

学生登山の主流となったWV部

近年ではWV部が部数、部員数ともに学生登山クラブの中の主流となりました。

山岳部が休部となりWV部が唯一の登山サークルとなっている大学も見受けられるのが現状です。

ほぼ四〇年前から、春日井教授などが念じていた通りの「山岳部に入らなくても好きな登山ができる」時代となり、山岳部が掲げ続けたアルピニズムという急進的な思想が衰退

してきたのです。

山岳部とは異なる登山クラブの生成発展を想定していた春日井教授の行動の数々が布石となって、学生ワンダーフォーゲル部は日本の登山史の中に大きな足跡を残したのです。

期待されるOB会の活躍

WVは競技種目ではないために無目標になりやすいといわれています。今日では活動内容を多様化させたために部員の共通の目標が定まらなくなっているWV部が私立大学の中に多く見受けられます。

レジャーとして群れることだけを楽しむのでは、本来の課外活動としての教育的価値は無きに等しいのではないでしょうか。

OB会が活躍している大学は、国立大学に多く見受けられるようです。

OB会組織がないために、活動の目標さえ定まらず迷走気味のWV部も多数見受けられます。

OB会が健在であれば登山技術の伝承も可能であり、部の伝統も継承されやすい筈です。明治大学WV部OB会のような手厚い支援体制（新入会員受入、監督、コーチ、小屋合宿、部報の発行などなど）は、他大学WV部OB会の鑑であると思われます。

私は明治大学卒ですが、WVのOBではありません。この一〇年来、学生ワンダーフォーゲルの歴史を調べてきた者です。多くの母校WV部OB諸兄にも話を伺い、資料や情報を

頂戴したご縁で本文を執筆させていただきました。

また全国の多くの大学WV部OB諸氏の協力とご支援をいただいて、学生ワンダーフォーゲルの歴史書を出版することができました。

末尾ながら、明治大学ワンダーフォーゲル部ならびにワンダーフォーゲル部OB会が、これからも末永く活躍を続けられることを祈念いたしております。

主な参考文献

明治大学体育会WV部

『三十年のあゆみ』一九六六年

『六十年のあゆみ』一九九七年

春日井薫先生追想録『千紫万紅』一九八三年

城島紀夫『ワンダーフォーゲル活動のあゆみ』

古今書院 二〇一五年

(日本図書館協会選定図書)

著者紹介

城島紀夫 (ジヨウジマ ノリオ)

日本山岳会会員1935年佐賀県 明治大学卒
2005年より我が国の大学ワンダーフォーゲルの歴史を調査研究

昔を思い今への願い

BN 120 鈴木善次郎 (昭和十七年商)

昭和十七年の六月の初め、繰り上げ卒業という、激化する戦争の為に戦地へ大学生も積極的に動員される命令が下されて、六か月卒業が繰り上げられ、九月中に卒業してしまう事となりました。そんなふうになにかあわただしかった時、卒業する部員だけで旅行しようと部長に申し込みましたら、春日井部長も快く参加して下さいました。そこで田伏、私、浅井、村上、竹沢、金井、佐野、合計八名で、私がプランを立て、沼沢沼と会津二俣温泉に行く事となりました。当時、無名に等しい沼沢沼へは、会津線が宮下迄開通していましたが、沼下へ行き、歩いて登って沼畔に泊まったのです。その前に、武運を祈る意味も兼ねて、会津若松の白虎隊の墓に参拝しました。戦争の激しくなってきた時代を反映して、と思います。天気の良い日でした。沼沢沼に行く途中、八町温泉で、昼下がりに先生と一緒に入浴をしました。その後行った沼沢沼は、夜間二十万kmの揚水をして、昼間発電をなすもので、沼の水は深々とした色をなしていました。当時の仲間では金井君も既になく、村上、竹沢両君の戦死と共に今、先生も他界しました。

白虎隊の墓前で撮った写真をみれば四人故人となり、残る田伏、私、浅井、佐野、の四

人となつてしまいました。先生が居れば、その想いでも、そのままにあったのに、と先日写真帳を開き、淋しさがこみ上げて来ました。先生とは教室で、銀行論の講義を受ける時、微笑をもつて最前列の私を見てくれた事が印象に残ります。

十七年の三月の頃でしたか、先生が部の小屋を建てる場所を捜そうといわれ鹿沢から草津へと旅したことも楽しかった思い出です。スキーをかついで三原へ歩いて帰る時、腹がへって、一軒の農家に入って、ソバガキをこ馳走になりました。先生はともうまいと喜んでおられました。その日草軽鉄道が三原で仲々来なく陽が暮れようとしていたので、先生は駅長に草津まで電車を動かせと掛け合いました。乗客は我等と他二人計七人だけでした。代表として、どうゆうふうに話をされたのか分かりませんが、遂に電車は動き草津に行くことができました。電車が来た時は、ひたすら先生に感謝しました。勿論、部員以外の客も喜んだらうと思います。草津で泊まった旅館が七星館で、あとから考えると、そこは二十九年十一月に落成した草津白根小屋(先生が名付け親)の地主の家だったとは因縁だと思います。そこにいた房子さんという女中さん(一寸美人でした)、将来良いぞ、としきりにいわれたのが印象に残っています。昭和二十九年三月か四月に学校に行ったか呼ばれて先生に会って、戦中連中と来宮の明大寮に一緒に行こうといわれました。田伏、

若月、金子、日置諸氏と、その他一人か二人が同行しました。先生と一夜を過ごし、久しぶりに昔の話を聞かせてもらったり、戦中の消息等も話してくれました。その時部活動に参加してくれる様に、とのお話がありました。

七月、夏合宿の日光光徳牧場へ参加して、戦後のワンダーフォーゲル部に初めて接しました。はからずも予科のドイツ語を教わった木下先生が部長で、田伏君共々、予科の話をしました時、小屋が欲しいという話が出ました。雨が激しく降った夜、だつたと覚えています。翌朝、晴天で、合宿と別れて金精峠を越えて丸沼に行きました。メンバーは田伏、若月、林、私の四人でした。

丸沼の沼畔に空の牛小屋が建っているのを見て、昨夜の話が想い出され、小屋にしたかどうかということで四人の意見が一致しました。帰郷後、春日井先生宅に一同行つて、小屋を建てたいと訴えました。すると先生は激励ともとれる、建てるならやってみろ、というようなことをおっしゃいました。その瞬間から、小屋建設に向かって全力がそがれました。

勿論、先生の陰からの援助がありました。住所録の事、学内事情、現実のワンダーフォーゲルの活動状況です。田伏君と私は先頭に立つて小屋建設のアピールを行い、たぐさんの先輩後輩の援助を得て、十一月七日、落成式が行われました。先生は当時のお金としては破格の金額を一番先に出してくださいました。それは、私達への激励でした。

また私が監督となつてから、時には総会にいらつしやり、時間を守れと怒られた事もあります。部の活動に、本当に関心を示し、陰より激励してくれました。先生に会う機会は少なくなつてしまいましたが、厳しさの中にある温厚な顔は忘れることが出来ません。部が創立されてから四十五年、先生が亡くなられ、残念の心の深きものがあります。先生と共に歩んだ数々の事が想い出されます。草津の山小屋の成立に対して真実を知っている先生。先生が一番多く寄付してくれた山小屋建設資金を知らないで、昨年、大学の要職にある人は、大学が建てたといっていました。

私は、先生の人となりと歴史を知ってもらい、部の発展に尽くす事が、今、一つの大きな目的だと思います。

(春日井薫先生追想録 千紫万紅より)

戦中・戦後のWV

BN 181 新村貞男(昭和二十三年政経)

昨今、いろいろな戦争中の体験記が出て来ております。我が部にも戦争中の経過を記録しておいて良いのではないか。幸か不幸か私は一九四三(昭和十八年)春に入部し一九四八(昭和二十三年)に卒業しており、此の点の記録に適任と思ひ、筆を執らせてもらいました。十五年戦争の末期は、時局遂行の為、合同合併が盛んに流行しまして、大学も

合併せよという空気もありました。そんな中で部も寄せ集めまとめられる訳で、我がWV、山岳、ボーイスカウトが合併して行軍山岳部とされました。中国大陸での戦争では、機械化はまだまだで。馬は、おえらいさんのもの、庶民の兵は大陸を歩くのが原則。だから歩行力を強める事が戦力増強となり「歩け歩け運動」が奨励されました。山岳戦も想定され、時局にあつたクラブでした。そんな中で私達も山に行けたわけです。ただ戦局が厳しいから交通鉄道(車での山行等あり得ない)も今のEデン迄内しか切符は自由に買えない。(中央線なら高尾まで)バスは木炭車で回数も少なく、急な登り坂は降りて押し上げた。靴も軍靴があれば上々ですが、一般には入手出来ず、私は専ら草履だった。雨具は黄色の油紙ランブはローソク。でも娑婆に居られる内はいいが、例の昭和十八年十二月の学徒出陣であらましの先輩はいなくなり、部も有名無実となる。負戦近くなるとザックで山里を歩いていると買い出しと思われて巡査に調べられました。駿河台本館は参謀本部に占拠されました。(お陰で戦后陸測の五万図が散乱していて入手出来たのは幸)この校舎はギリギリの処で焼け残つたので、我が部のあつた部室(本館西側端)四階からは、神田神保町方面の焼け野原が一望できた。そして運よく戦場から生き延びて復員して来た先輩(昭和十六年入学、昭和二十一年卒を主体とした方々で卒業しても就職難で苦労した)がポチポチ集

まってきた。行軍山岳部は自然消滅。「WV」は独のヒットラーの後裔とGHQから睨まれそーなので、健歩部と変名。教室の黒板の端に新人募集をした。(掲示板はポスターもなく一番手頃な方法) 喰うものがない時だから、容易には集まらず、部の再建は容易ではなかった。でも復員の先輩等と共に二十人位になっただろう。昭和二十一年になって「体育部は体育館の地下の長屋に集まれ」という事で、山岳部の下、音楽部のあった長屋の端の狭いところに転居した。今までは体育会に所属していなかった、此処で初めて体育会に所属する訳である。所が予算審議で山岳部と合併しろと云われ、違うんだと力説(山岳は山を征服、ヒマラヤを目指す。我々は自然を愛し、融けこむんだと)して何とか危機を乗り切った。

生活物資が何もない時代だったが、山への熱情はそれだけ深く、夏休み等長期山行には、買い出しの日を二両日位入れてから入山した。(当時、山岳部の主将助川さんの弟さんが烏帽子岳登山口の濁小屋で(現在は高瀬湖の底)ザックの荷を狙われて殺害された事件があった)昭和二二年に部室が地下長屋の中央部一階の広い部屋に転居出来た。空手部の居た処でこの引越は恐ろしかった。なぜって、剣道も柔道もSTOPされていて、空手がGHQから許されて当時一番権力を持っていた。こわいお兄さんが揃っていた。(空けわたしを拒まれた)。WVは渡り鳥だから定着合宿は

向かないと云って専ら放浪の旅を主体とした。昭和二四年になって大橋OBの主導で女子部員が入る様になった。(深川の阿部アキBN二二) 神保町の田中治子BN二二) 慶応、立教のWVとの連合やら、GHQからの呼び出し等がある。(ここら辺りから城島紀夫さんのWVの歴史に明細あり)

学制改革での新制大学で、体育が必修科目となり、体育部に居れば実技・正課が免除されるので我が部は容易なので、登山ブームも加わり爾後部員数は激増する事になった。

春日井先生から、

教えて頂いた事

BN 301 小宮盛治(昭和三十一年商)

(学生時代前後の私の思い出)

一九五〇年代、高校生の私は、東京六大学野球をラジオで聞き、明治大学に進学しました。和泉校舎では、教養課程で、学長職の春日井先生の経済学を選択。ゴルフ焼けた先生の授業での思い出は、『ペンペン草騒動』です。概略は、川崎製鉄(JFE)の設備投資を、一万田日銀総裁が認めなかった裏話を、ゴルフ場で入手出来た「情報入手の重要性」を、ユーモラスに語った話です。(人・物・金・情報)。更に、明大生は「物の見方、考え方」は東大生と同じだが、残念なことに、体力が無いと指摘、ワングル入部を推奨して下さい

ました。当然私は、在学時の進路は、小牧正道(BN一七〇)ゼミの金融論、そして就活は、当時助手であった柴田正利先生の推薦状を持つて、松本新四郎(BN一二)先輩の勤務する専門商社へ。入社してからの企業の景気の変動は、予想以上にはげしい動きでした。

(春日井先生、勲二等受章とMWVマーチ)

再度、春日井薫先生にお会い出来たのは、一九七一年四月、MWVが催した叙勲祝賀会で。堅苦しい祝賀の席の内容は忘れましたが、盛況裏の中で、校歌を斉唱し散会になりました。

私にとつては、先生の著書「景気変動」を祝いの品として拝受できた事で、金融を勉強する再出発の機会を得るチャンスが出来ました。春日井先生が指摘された「体力が無い」と云う事は、たぶん、めざす目的を疎かにすれば、東大生に負ける事を論されたのでしよう。又、春日井先生のお好きだった「MWVマーチ」は、「アリヤリヤ・コリヤリヤ」の合いの手の不思議と、明治大学は、「日本の超一流大学ではない」との学生へのメッセージと先生の心に秘めた祖国愛が、この歌詞には、表現されている様に、今は、理解しております。

結語

《金融と人間関係》を、私の人生のテーマにして、高齢者の輝く社会をめざして。

「オールなため会」ワンデルング参加者一覧

	No. 1		No. 2		No. 3		No. 4		No. 5		No. 6		
地域	8/29 谷川岳 群馬県		8/29 皇居周辺 (天守台跡：標高30m) 東京都		8/29 高尾山（599m） 東京都		8/29 秩父（伊豆ヶ岳） 埼玉県		8/29 秋田駒ヶ岳 秋田県		8/29 角田山 新潟県		
企画者	859	丸山 貞二	1115	上原 誠	795	濱田 稔	Aコース	788	原田 博文	898	小林 香織	1157	浦部 頼之
	448	相良 幾代	157	中村 輝雄	392	内田 吉成	Bコース	527	池田 陽一	563	岸 恵智子	1065	斉藤 宏
参加者		相良 忠一	181	新村 貞男	393	植木 正子	Bコース	543	井出 健一	570	一色 雅男	1153	山田 立
	505	椎橋 稔	228	島林 順三	395	中山 光史	Bコース	558	奥倉 勇一	715	小林 雪夫	1172	浦部 香織
	661	大賀 徹雄	339	足立 康弘	398	小林 伸行	Bコース	775	小田野義之	717	住田 孔一	小3	浦部 哲平
	683	横手 一男	343	佐藤 政弘	406	苅谷 恒雄	Bコース	778	宮澤 邦雄	780	渡部 彰悦		
	705	杉山 裕	345	吉田 修	451	山田 祥二	Bコース	783	奥富 孝夫	792	柳川 俊泰		
	710	関川 正博	361	吉川 利和	455	飯村 朋園	Aコース	785	小川 公平	826	村木 隆		
	728	横尾 廣志	1146	堀江 典昭	615	川井 武子	Bコース				本間 渡		
	838	龍 君江	1154	島村 明弘	719	鈴木 幸代	Aコース						
	888	関口 健二	中1	島村 元	751	諏訪本充弘	Aコース						
	2120	鈴木 元典	小5	島村 匠	小1	鈴木 律子	Aコース						
人 数	12名		12名		12名		8名		9名		5名		
備 考	※雨天のため、全員 一般コースに変更				※Aコース 5名 Bコース 7名								

	No. 7		No. 8		No. 9		No. 10		No. 11		No. 12	
地域	8/29 鋸山 (標高330m) 千葉県		8/29 鈴鹿山脈・御在所岳 三重県		10/24 矢倉岳：神奈川県 (M W V & なため会 ジョイントW)		9/12・13 吉野ヶ里遺跡周辺 佐賀県		8/29 蒜山高原 岡山県		8/29・30 多良岳 (983m) 周辺 長崎県	
企画者	871	平田 正博	1120	天野 敬之	学生	永田 真帆	1022	高取 克好	860	谷脇 嘉徳	1180	出浦 裕二
参加者						由水 雅也					1186	寺田 征史
	299	大内 善一	438	伊藤 新吾			268	浜田 和正	318	國東 照正		
	301	小宮 盛治	477	天野 徹明			520	鷺津 博昭	363	鈴木 光敬		
	858	遠山 高広	612	山内 利人			658	江口 基雄	405	洲脇 泰雄		
			682	森田 峰彦			794	光浦 毅	471	小川 泰助		
			753	小松 宏之			810	村山 孝	797	田村 清己		
			906	石田 猛			917	繁谷 浩	807	河上 和正		
							937	野中 成浩	804	西村 佐一		
							1005	原 宏	830	丸山 賢司		
							1014	松尾 洋一	871	平田 正博		
							1035	兼廣 克巳	909	谷 浩明		
					学生	32名	1039	佐々木 隆	929	杉田 勝彦		
					O B	19名			986	石原 健		
									1241	池川太気郎		
人数	4名		7名		51名		12名		14名		2名	

	No. 13		No. 14		No. 15	
地域	9/8・9 草津温泉・芳ヶ平 群馬県		8/29 東海道品川宿 東京		8/29 金峰山 山梨県	
企画者	598	長侶 栄喜	625	菅野 隆夫	897	山下 仁志
参加者	594	秋元 道別	483	羽部 隆	886	佐藤伊津英
	597	大洞 聡	484	中田 弘	890	田邊 強
	599	清水 邦彦	487	鈴木 康弘	892	永井 正道
	601	池上 勝彦	490	長嵩 園好	894	藤原 雅志
	612	山内 利人	494	木島 敏夫		
	615	川井 武子	501	前田 芳弘		
		長侶 直子	504	平山 孝		
			506	西村 信子		
			507	笹治 禮子		
			513	山本 務		
			764	高橋 寿子		
			835	猪狩 稔		
			3年	神内 亜美		
人数	8名		14名		5名	

合計 175名

全国一斉「オールなため会」 ワンデルング

BN 795 濱田 稔 (昭和五十一年商)

台風一七・一八号による記録的被害が栃木・茨木を中心に発生しており、土砂崩れ、洪水による悲惨な状況が報じられています。災害にあわれた方、OBの方にお見舞い申し上げます。

その十日ほど前の八月二十九日を中心に全国一斉「オールなため会」ワンデルングが行われました。事務局には十五地域の企画書が出されおよそ一二〇名の方が参加されました。秋田駒ヶ岳は、雨も降らず時々晴天だったようですが、雨に降られたところが大方のようでした。九月八、九日実施の芳が平では、激しい雨で計画変更があったそうです。どのワンデルングも晴天には恵まれなかったようですが、私はこれこそMWVにふさわしく、こんな天気で良かったと思つて今つています。「雨にもめげずひるまずMWV「前へ」」との天からのメッセージと受け止めています。また、MWV創設者で初代部長の春日井薫先生は、最悪の事態を想定して行動しろと指導されていたと伺っております。

この企画でいろいろ感じたことを書きたいと思います。その前に、この企画に快諾された企画者の皆様には、ご好意に甘え勝手なお願いばかりして大変ご迷惑をおかけしました。

それにもかかわらずご尽力をいただきました。この場をお借りして、感謝とお礼を申し上げます。

このワンデルングには一二〇名が参加されましたが、最高齢は皇居周辺ワンデルングのB No. 一五七中村 輝雄先輩、御年九三歳です。最年少は高尾山ワンデルング参加のB No. 七一九鈴木幸代OGのお孫さん小一の律子ちゃん六歳です。また、新潟角田山ワンデルングのB No. 一一五七浦部頼之さんは、奥さんのB No. 一一七二浦部香織さんと小三の哲平君のファミリーで参加されました。皇居周辺ワンデルングのB No. 一一五四島村明弘さんは中一の元君、小五の巧君と一緒に参加です。幅広い世代の、なため会員と「関係者」が、参加され大いに盛り上げてくれました。参加者の平均年齢は、およそ六五歳でした。

年代ごとでは、手白山荘建設に携わった代の会員が多く、その次が昭和五〇年代前半の代でした。その代には、辰巳午の会とか海千山千会や華の三七の会、情断会、郷路会のように同期会に名前が付いているのは、偶然でしょうか。ちなみにこの代が参加者ベスト五です。しかし、昭和三三年度卒から平成元年度卒までほとんどの代の会員が参加されたことは、特筆すべきことだと思います。また、平成五年度から九年度までの会員も参加され、しかも平成九年度卒のB No. 一一八〇出浦裕二OBとB No. 一一八六寺田征史OBは、長崎県多良岳(九八三M)ワンデルングの企画をさ

れました。両OBは、今回の参加者会員の最年少で四〇歳です。

いろいろな事情で参加されなかったOB・OGも多数いらっしゃいました。

私の参加した高尾山は、三ツ星レストランで名を馳せた人気のある山ではありますが、なため会同様、様々な顔を持った「名山」です。高尾山は自然の豊かな山で、昆虫や植物の宝庫であります。昆虫の種類は、五、六千種に及ぶそうです。また、低山にもかかわらず1300種余りの植物が分布しており、日本全国に生育する植物の四分の一に当たり、日本でも最も植物の種類が多い山です。そのほか、日本から台湾、東南アジアを飛翔する蝶「アサギマダラ」が観察される山。冬至の頃、「ダイヤモンド富士」が見られる山。12月から1月にかけてみられるシモバシラ(氷華)等々どの季節に訪れても楽しめる山です。

この名山で行われたワンデルングは、昭和三五年度卒B No. 三九五中山光史先輩に奔走していたとき、中山先輩前後の代の方が多く参加されました。また、初参加のOB・OG、お孫さんを連れての参加者があったりして、十二名が清滝コースとケーブルを利用した吊り橋コースに別れて登りました。清滝コースは傘もさすほどでもなく、涼しく人も少なく、自然を満喫できた快適なワンデルングを楽しむことができました。山頂で待つこと十分。やってきました吊り橋コースのメンバー。ど

の顔も輝いていました。

山田祥二先輩がどこから調達してきたのかお手製の「八〇」のウチワを両手に掲げ、記念旗をかざし山頂での記念撮影「カシャッ」。周囲には何事があったのかと驚きと好奇で見つめる二〇〇個の眼。薬王院に参拝し、とても初対面同士とは思えないほど和気あいあいと下山。ワンドルングの後の懇親会も、各代の話題やいろいろな話題が飛び交い華が咲き、名山に「恥じない」素晴らしく、楽しいものでした。

NO. 一 谷川岳…群馬県

BN 888 関口健二（昭和五十六年農）

二〇一五年八月二十九日（土）雨
実働時間 四時間二十五分

天神平く熊沢避難小屋く谷川岳肩の小屋く谷川岳トマノ耳く谷川岳オキノ耳くコース戻るく天神平

参加者

BNBNBNBNBNBN 相良幾代 相良忠一
888838710683505448 椎橋 稔
関川正博 横手一男 大賀徹雄
関口健二 龍 君江 杉山 裕
2120859728705661 横尾廣志
丸山貞二
鈴木元典

大宮駅ホームにオーラを放ちながら新幹線を待つ人あり。火傷しそうなので遠巻きに少しずつ近付いて行くと腕に「M W V」の刺繍。どなたか分からないが兎に角挨拶。

「お早うございます。八八八番関口と申します」

「？お早うございませう」

いつもの『？』って思われそうな服装なのだがバックルナンバーって本当に便利。それだけでグツと近くなるし身元確認の必要もなくなる。

しばらく話して「すみません、お名前は？」

「横手です」

えっ？横手さんBN六八三横手一男つてもっとふつくらしてた記憶が…。あれやこれやで新幹線到着。車内はちゃんとグループが出来ていて♪大型バスにいい乗ってます。切符を順に回すので、ハイッ！お隣りへ♪でな気分。谷川岳ロープウェイ土台口へ着くも残念ながらの雨なので「全員ロープウェイコース」に予定変更。天神平駅まで十五分間の空の旅。

ゴンドラの中は

「昔、天神平から土台口までこのロープウェイの下を直滑降で滑って降りた」

「新潟行ったら雪が無かったのですそのまま北海道行つて滑ってきた」

などの Unbelievable アンビリーバボーな話がボンボン。

天狗の留まり場一六七〇M。夜明け前に解

散するらしく一羽も居ない。

天神ザンゲ岩一八三〇M。道標の文字を見て皆息を吞むが、懺悔した者は誰もいなかった。

ここで相良さんBN四四八のザックから大きいタッパにギッシリ詰まった梨が出現。梨つて水に沈むの知ってます？そう、水より重いのです。

『こんな重い物を…。海より深く、空より高い母の愛か…』

美味しい梨で、いろんな事を考えて、夜久し振りに母親に電話しました。

谷川岳肩の小屋一九一〇Mランチ。多少風はあるが雨は降らず。谷川岳の天候は難しい。

谷川岳トマノ耳、オキノ耳。

オキノ耳にて、茂倉岳（四大合W）で亡くなった堀井さんへ黙祷。

相良さん、ご夫婦と一緒に山とは羨ましい。うちなんか「絶対無理」だそうです。

御主人は誰かが知っている強豪校の元野球部員で、甲子園出場も決まっていたが不祥事で出場辞退になったそうです。リハビリを兼ねて夫婦で山を再開されたとの事。

無事十五時二二分天神平に帰還。丸山さん、凄いわぁ。コースタイム企画書通りですよ。

現役時に登ったはずだが記憶無し。でも地図見て感じるほど楽なコースじゃないね。

十六時四五―十八時四五分まで場所を移して天狗の懺悔大会。もとい、渡り鳥の懇親会。

「単身生活、楽しくて楽しくて」と懺悔し

たら、「もうしばらくしたら、『恋しくて恋しくて』になるから」と諸先輩方は口を揃えて仰るのでした。「……………」

なんとも楽しい旅でございました。また御一緒にしましょう。
(文責 関口)

NO. 二 皇居周辺…東京都

(天守台跡 標高三十M)

BN 115 上原 誠 (平成五年政経)

八十周年記念事業の一環として全国一斉ワンドルングのアイデアが出たなかで、登山は無理だけどOB会の企画に参加したい方もいるであろうし、なるべく多くのOBに参加して貰おうとの趣旨のもと、東京都心のコースも設定することになった。というものの、さすがにOB会の企画である以上、歩いてどこかに登らねば示しがつかない、このことで、東京のど真ん中の皇居の天守台跡(標高約三十M)をピークに設定し、東京駅をスタートに、皇居を経て、駿河台のわれらが母校まで歩くコースを設定した。企画者としては、なかなか参加者が集まるのか不安なところであったが、結果として大先輩のOBが多数参加してくだり、とても賑やかな一日となった。参加者は、以下のとおり(敬称略)。
一五七中村輝雄、一八一新村貞男、二二八島林順三、三三九足立康弘、三四三佐藤政弘、三四五吉田修、三六一吉川利和、一一一五上

原誠、一一四六堀江典昭、一一五四島村明弘、島村元(長男…中一)、島村匠(次男…小五)。バックルナンバーが一〇〇番に亘るとも幅の広い参加者が集まった。そして、最年長の中村OBは御年九十三歳、最年少の島村OBの子供との年齢差はちょうど八十歳。MWVが歩んできた、八十年の年月の長さを思わずにはいられなかった。島村OBの子供が中村OBの年齢になるさらなる八十年後に、日本は、世界は、明治大学は、MWVはどうなっているのか……、などと考えてしまう顔ぶれであった。

コースは、東京駅を起点に、皇居天守台跡を目指し、その後は、駿河台の本校まで歩く予定である。当日は、駅舎が新しくなった東京駅の前で記念写真を撮ってスタート。日本の金融経済の中心地として高層ビルが林立する丸の内を抜けると、お堀端に出て江戸時代の城門の遺構を残す大手門をくぐって皇居に入場することになる。ちなみに入場料は無料で、月曜・金曜を除き基本的に毎日公開されている。敷地内は広大で、江戸時代の役人が詰めていた百人番所・同心番所といった検問所跡や、庭園・雑木林と言った自然豊かな散策場所が広がっている。木々の背景には超近代的な高層ビルが迫り、独特の景観が楽しめる。目指す天守台跡は、そもそも高台にあり、かなり急な汐見坂を登ることになる。これは、その昔、今の新橋から皇居前広場近くまで日比谷入江が入り込み、海が見えたことに由来

している。高台に出ると、現在は芝生の広場になっているが、そこは江戸城の中心部本丸跡で、往時は松の廊下やら大奥などがあった場所である。最奥部に目指す天守台跡があり、現在は、石垣の土台が高さ十メートルほど残るのみである。上部は展望台になっており、やはり皇居の木々の緑と背後の高層ビルが不思議な調和を見せ、魅力的な景観を楽しませてくれる。ある時代のOBにとっては、皇居はトレーニングコースとして在学中に何百週と走った苦い思い出の場所かもしれないが、皇居の内部はとても魅力的な場所なので、散策したことがない方は、ぜひ一度訪問されることをお勧めする。ここが本日の目指すピークであったので記念撮影をする。中村OB、新村OBは、九十歳を超えているものの、元気に天守台跡まで歩かれており、参加者一同驚きの様子である。その後、天守台跡に近い北詰橋門を出て、本校リバティタワーまで歩く。

リバティタワーでも記念撮影をした後に、近隣の中華料理店で懇親会を行った。懇親会では、中村OB、新村OBから草創期の歴史や春日井初代部長のエピソードのほか、戦時中の話など貴重なお話を頂いた。また、吉田OBからは、草津小屋や新入部員が二〇〇名もいた当時の話などをお聞きした。一方で若手OBからは、平成時代のワングル話しなどをして、その移り変わりに大いに盛り上がった。大先輩のOBの方々は、なかなか

か山登りまでは参加できないものの、このような形でOBの交流を図れることに大変喜ばれている様子であった。若手のOBとしても、まさにMWWの歴史を感じることができ、貴重な一日であった。

NO. 三 高尾山・東京都

BN 395 中山光史（昭和三十五年商）

八月二十九日高尾山吊り橋コースを老若男女七名がわきあいあい元気に歩きました。

あいにくの雨もなんのその。

いざ共に我らは渡り鳥ヨイヨイだ。

山頂でびわ滝コースのヤング五名と合流。輝く国土を遍歴してきた一行十二名が記念写真。

山田祥二OBの徹夜？労作の八十Thと銘打ったうちわを両手に 皆さん笑顔で収まりました。

下ってケープル下の茶屋で、祝八十周年！乾杯 懇親会。賑やかにお喋りは尽きない。

最後に諏訪本監督の手締めで、お開き。

めでたし、めでたし。雨は上がっています。空高く我らは渡り鳥 明日はどこ行こうか！尚分お一部は恐れ多くも春日井薫先生作詞のMWWマーチからの拝借です。

安心と元氣

BN 451 山田祥二（昭和三十七年商）

祝 八十周年 なかなか良い企画でどのコースを選ぶうかなと楽しみでした。

濱田OBPLの高尾山Wでケープルを使うか否かの二つのコースがあり高尾山の沿革など詳しく調べたパンフレットをお送りいただき大変気を使っていたきました。

OB会の登山は私が七十歳になってより始め陣馬山・箱根大涌谷と迷惑をかけ今回は妻の付き添いなしで不安になり七月より町会の夏休みラジオ体操に参加したところ三日目で足が激痛になり針とマッサージで直ったのですが登山は無理かなと思ったのですが幸い小雨で暑くはなく眺望はなかったですがOGよりの差入れのプラム、ブドウと暑い一口のコーヒーなど食事、水分制限の私の体にとってこんなに美味しい物はないと思い、昼は先輩たちのおもしろい話で楽しく麦とろろ御飯が大変美味しかったです。今回もいつまでもワンゲルの皆様と参加することは安心で元気をもらうことで本当に幸せを感じております。

NO. 四 秩父・伊豆ヶ岳・埼玉県

BN 788 原田博文（昭和五十年経営）

実行委員会から埼玉で一つ企画を立てるよ

うにとの指示により考えたのが今回の伊豆ヶ岳。当初、参加者は同期だけだろうと思っていきましたが、思いがけず山久会（昭和三十九年度卒）の先輩三名の参加を得て総勢八名、賑やかなワンデルングとなりました。

前夜の天気予報ではほぼ一日雨。何でこんな日にも思いながら「正丸」駅に集合しましたが、幸いにも合羽を着るほどの降りではなく一安心です。初対面の人は自己紹介をし、和気あいあいと出発。ペース配分が下手くそで同期のワンデルングでは絶対にコースリーダーに指名されない私ですが、今回は企画者の責任としてコースリーダーを仰せつかりました。道は所どころぬかるんではいるものの歩きにくいという程ではありません。濡れた鎖場は途中で断念したもの、ほぼ予定通りに伊豆ヶ岳山頂に到着。「記念旗」を囲んで記念撮影の後お昼食べて下山開始。帰路は正丸峠を経由してほぼ定刻に「正丸」駅に帰着。この歳になつても標準タイムで歩けるのはさすがMWW出身のワンダーラーです。

第二部は電車で「飯能」に移動して懇親会。風呂でさっぱりしてから宴会開始。お互いMWWというバックグラウンド持つ者同士、近況報告やら現役時代のことで話が弾み、時の経つのを忘れるほどでした。伊豆ヶ岳企画は大成しました。

BN 527 池田陽一（昭和三十九年経営）

拝啓 九月に入りうつと嬉しい日々が続いております。先日のM W V創部八十周年記念全国一斉ワンデルングの伊豆ヶ岳コースでは大変お世話になり、ありがとうございました。久しぶりの山登りに始めは心配していたのですが途中までも一緒に歩いて私なりに満足しています。と言うのも、私は持病のぜんそくがあり山登りは医者から止められておりますので、皆さんに迷惑がかかると申し訳ないと思っております。やはり途中から引き返す事になりましたが、下りの一人旅はそれは気分良く自然を大いに満喫しました。

うす暗い杉の林間コースは格好の森林浴になり、また山里の道に咲くコスモスが目を楽しませてくれました。その後周りを山に囲まれた正丸駅付近で二時間程ぶらぶらしていました。一時間に二本くらい電車が止まるのに乗降客は一人も無くそれは静かな駅舎でした。たまにはこのような時間つぶしも必要かなと思っております。今後このような旅がありましたら是非誘ってください。

情断会の益々の発展を祈っています。まずは書中にてお礼まで。

BN 558 奥倉勇一（昭和三十九年文）

平成二十七年八月二十九日全国一斉に八十周年ワンデルングが行われた。

最初は谷川岳に行くつもりでいたが、メンバーを見ると猛者ばかりで西黒尾根を登ると言う、気は若いつもりでいるが体は確実に年をとっている、これはついて行かれないと思ひやメ（最近私の近くで七十二歳の男性が熱中症から心筋梗塞になり一カ月入院した人がいるので、注意！注意！）高尾山はどうかと思つたが混雑するといやなのでやメ、そこで電車賃が安く、我が家から比較的近い伊豆ヶ岳に参加する事にした。

駅を降りて雨が降っていたらやめようと思つていたが、曇り空なので皆について行くことにした。

私の信条として駅を降りて雨が降っていたら登らない事になっている。最近、私の雨具はビニール傘で足りている。山は晴れていないと面白くない。

参加したメンバーは我々三十九年度卒二、名五十年年度卒五名の二代だけなので、まとまりがあつて楽しかった。

BN 775 小田野義之（昭和五十年政経）

開催日が近づくにつれ、天気予報が全国的に悪く変わってきて、これは雨男が密かに八十周年実行委員会に紛れ込んでいるに違いないと、ひとり疑心暗鬼になっていましたが、当日は時折り傘をさす者数名、合羽着用者なしという思わぬ結果で、ヤレヤレでした。

もちろん富士山や他の景色を見ることが叶

わなかったのですが、天気予報のせいかな登山者もごく少なく、コースもだいたいが歩きやすい道で、同僚のMも奥さん連れて来ようと張り切っていたほど、なかなか良いワンデルングになりました。

企画者でコースリーダーの原田のペースに惑わされず、コースタイムに5分と違わず正丸駅に着けたのはベースメーカーの私の実力です（自慢！）。

伊豆ヶ岳山頂でfacebookに投稿しようがなばつたけど通じなかったのが残念。スナップ写真があまりにも少なかったのは私の怠慢でした。

BN 783 奥富孝夫（昭和五十年文）

同期の原田が企画した、奥武蔵の伊豆ヶ岳ワンデルングに参加することにした。久しぶりのチームでの山登り。精鋭の揃う同期（情断会）についていくため、良い準備が必要だ。四月、埼玉県滑川町の二ノ宮山に行く。二万五千分の一地形図「武蔵小川」の中の標高一三〇メートルほどの山だが、麓の池からは約七〇mほどの比高があり、大変展望の良い山である。丘陵地帯からひとつ突出して、山頂には展望台が造られている。自宅の青梅市から主に旧鎌倉街道に沿って、歴史に名を残す笛吹峠などを超えて自転車走らせ

た。一日がかりのバイクアンドクライム。

八月には羽田空港近くの京浜急行大鳥居駅

に行く機会があったので、その帰りにつばさ総合高校から多摩川河口に一番近く歩いて行ける大師橋を渡り、多摩川堤防を上流に歩く。六号橋のたもとから旧東海道をJR川崎駅まで。このあたりの多摩川は、広々として静かでお勧め。最下流なので自転車も少なく安全である。

直前にはJR八高線の折原駅から山間部ののかな道を竹沢駅を過ぎ、小川町の西郊で槻川を渡り、ときがわ町雷電山の南標高三〇〇mほどの山地を歩いた。のどかな水田の広がる都幾川左岸を八高線明覚駅まで歩く。新しく造られた木造の駅は、小高い台地に立ち趣がある。水田のあなたに奥武蔵の山々がひろがっている。このような小さなワンデルングのできる場所は東京や埼玉にも身近なところにある。

さて伊豆ヶ岳だがチャートという非常に硬い堆積岩の山で、山頂付近には岩場もあり、当日は小雨も降り大変滑りやすくなっていた。岩場は避けて安全なルートを選びました。

NO. 五 秋田駒ヶ岳・秋田県

参加者

PL―鍋つこ係 小林香織 (八九八)
岸恵智子 (五六三)
一色雅男 (五七〇)
小林雪夫 (七一一)
住田孔一 (七一一)

渡辺彰悦 (七八〇)
柳川俊康 (七九二)
村木 隆 (八二六)
本間 渡 (スキー部OB)
参加数 県内四名 県外五名 計九名

コース

八合目↪阿弥陀池 (男岳往復 女目岳 (秋田駒) 往復↪横岳↪焼森↪八合目

献立

昼食…だまこ鍋 (比内地鶏)、ごぼう、舞茸、芋の子、糸コン、あげ、ネギ、芹、だまこ

宿泊 駒ヶ岳温泉

予算 一万五千元
コースタイム

アルパこまくさ (一〇〇〇〇) ―八合目 (二〇二五/一〇四五) ―阿弥陀池・男岳分岐 (二二五五) ―男岳 (二二一〇/一二二五) ―阿弥陀小屋前 (二二四五/一四三三) (二二三〇―女目岳一三四五/一三三〇―小屋前一四〇〇) ―横岳一四五五―焼森一五〇五―八合目一五四五/一五五〇―アルパこまくさ一六一五―駒ヶ岳温泉一七〇〇

記録

マイカー入山規制中のためアルパこまくさに集合、バスで八合目に向かう。八合目には

駐車場と水場、トイレ、登山届を提出する案内所がある。各人で準備運動をし、岸OGを先頭にいよいよ秋田駒ヶ岳チームの行動開始。登り始めの整備された道には水を流し外部からの種子の持ち込みを防ぐため靴底をあらうようにしている。

片倉岳を回り込み阿弥陀池に向かうならかな道を行く。笹が両側に迫り足元にウメバチソウ、ヤマハハコが咲き、笹の間にオクトリカブトが青紫の花をつけている。片倉岳を回り込むと「赤土の広場」に出る。ベンチもあり晴れていれば田沢湖や目前に男岳が迫っている場所だが、今日はガスがかかり何も見えない。時折切れそうだが視界が広がるだけで、山頂までは見えない。広場から膝丈ほどの灌木が増え、チングルマやハイマツが覗くようになる。一登りで平坦な木道になると男岳の分岐になる。ここで山頂へ向かう班と阿弥陀池小屋前でベースを構える班に分かれる。昼食の具材をベース班に託し、男岳に向かう班はそれぞれのペースでまず木道の階段を馬の背へ。馬の背で女岳への道を分け、急な登りで高度を稼ぐ。小ピークの上り尾根が細くなるとほどなく男岳山頂の祠がガスの中に見えて、山頂にたどり着く。途中M・OBが調味料を渡すのを忘れたとベースに向かつてしまったので、男岳へは六人が到着。日ごろジムで鍛えているI・OBも靴が合わないところを十五分で登れ、まずまずのペース。下りの明

治と気合十分にガスの中を阿弥陀池まで下り、小屋近辺は十M程度の視界であった。昼食は秋田名物「だまこ鍋」「きりたんぼ」のように棒に巻き付けず、半つぶしのコメ団子を用いたもので県南では普通に食べられている料理だそう。お玉の代わりにコッフェルの小鍋で掬うところが、さすがワングルと唸らせたPLに料理の味でも唸らせ秋田名物料理の面目躍如。天気も上空に青空が出、時折視界が開け男岳や対岸越しに女目岳の山体が現れてきた。四連続雨に降られていたY・OBの悪運を自称「秋田の晴れ男」W・OBとPLの強運が優ったよう。天気も上向き、エネルギーを満たしたところで山頂へ向けて出発。元気なK・OGと天気男のW・OB、山に登りたいY・OBと山道でも強いH氏。階段になった道が終わり回り込むと一等三角点のある女目岳だ。秋田駒ヶ岳の最高峰であり、最近男女岳と記することが多くなっているようだが、ここには「秋田駒ヶ岳」の標識が立っている。残念ながら視界はなし、登頂班も合流し、登ってきた道を戻る計画だったようだったが横岳、焼森経由で八合目に戻るコースに変更する。こんなことしたら善さんに怒られるだろうな、など一瞬よぎったが、遅さきのコマクサがあるかもしれないという欲求が打ち勝ち、また登るのかとの文句をなだめ出発。予定では既に、バスに乗っている時間になっていた。横岳稜線までは割ときつい登りであったが笹を分けるようにして、稜線

へ。稜線からはガスが幾分晴れて断崖につきあがる男岳と女岳の裾野の巻き道が見え女目岳のすり鉢状の山容も見ることができた。横岳を過ぎるとほどなく黒色溶岩の砂礫の斜面になり、植物保護のロープが張られいかにもコマクサがありそうな雰囲気。左右に目を配りながら歩くと咲きそこないではなく、今シッカリ咲いているコマクサが一輪そしてまた一輪。焼森に近くなるとまだまだたくさん株の花を着けている。無理してコース変更した甲斐があったというもの。コマクサを堪能し、八合目のバス停に向け下る。道は雨水にえぐられ、シャクナゲの中を下り、小沢を渡り一登りし低木体を抜けていく。平らになり木道が出てくると、朝登り始めた水場の上に出る。顔を洗った靴を洗っていると全員揃い、バス乗り場へ。発車二分前であった。バスは細い林道を、ブナ林、伐採地を抜けアルパこまぐさに向かう。眼下に田沢湖も眺められ、振り返り見る秋田駒の山頂は雲の中である。アルパこまぐさから、それぞれの車に分乗し、水沢温泉郷のはずれにある今日の宿駒ヶ岳温泉に向かった。沢の音を聞きながら露天風呂で山の汗をながし、夕食へ。残念ながら今日中に帰るというK・OGは宿泊できないかったが、夕餉を楽しみ、また乳頭温泉郷の秘湯「鶴の湯」に浸り、再び宿に戻り部屋でゆっくりと思い出話に花を咲かせました。

嬉しい誤算

BN 898 小林香織（昭和五十六年農）

いつの間にか企画者になっていた！
—どうしよう？—

まずは三年上の村木先輩にご相談。さっそく県内の小林OB（七二五）と渡部OB（七八〇）に連絡を取って下さり、何とか四人は集まれそう、ふうー。

ところが範囲が北東北と判明する。

—それでは交通の便から田沢湖方面、秋田駒ヶ岳はどうでしょう？—

「山！？ムリムリムリ！（M・OB）」

即答だ。これには困った。

せっかくなので山の雰囲気をと、バスで八合目まで行つて帰る、ゆるい企画を提出する。

すると意外にも、関東方面OB諸氏から、「（当然）ピークまで行くんですね？」の問い合わせが続々。

—センパイ、もう登るつきやないですよ！—
それからは、同じ大曲にいらつしやる渡部OBも思いっきり巻き込み（スミマセン！）出来上がったのが、（秋田駒ヶ岳で鍋っこ＆夜の秘湯めぐり）。想定外から始まったワンデルングだが、三人のチームワークもバッチリでだんだん期待が膨らむ。

秋田に来て二十八年、秋田の先輩方と交流

を持てたことが本当にうれしい。

山は卒業以来というW・OB、「俺、登っちゃったよう！」と最高の笑顔！！

思いがけず関東方面の大先輩方にもご参加いただき、今まではお話も出来なかったけれど、これからはOB会等でお会いするのもとっても楽しみです。

他のワンデルングに参加している同期達と連絡を取り、動きがわかったのも面白かった。

色々といわず、いっぱいフォローしていただきました。

なんだかなつかしい、ここの良い時間でした。

素晴らしい機会を作ってくれた企画振興部の方達には本当に感謝です。

全国一斉ワンデルングは、MWVの絆を再確認させてくれました、マル。

秋田駒ヶ岳に参加して

BN 563 岸恵智子（昭和三十八年短）

前日の二十八日田沢湖高原温泉郷に一泊、翌二十九日アルパこまきさで、参加者（九名）と合流、アナログ人間の私、情報を得ることもなくぶつつけ本番の初顔合わせでした。なんと参加者全員私より遥か若い方々で私が最年長でありました。体力気力十分そう

な面々で緊張、もし歩けなかったらと不安が過ります。本来自然大好き人間、周りの秋色をあじわいつつ、時折現役時代の苦労話をするやらで、緊張もほぐれ、男岳をのぼり阿弥陀池に到着、先発隊がサブライズのだまこ鍋（きりたんぽに似ているとか）を用意して下さり、昔のワンデルングを思い出すシーンでした。時折陽も差し込み、いよいよ男女岳へ、二〇一三年山久会の山旅で鈴木正彦さんのみ登り、我々はコーヒを味わいながら阿弥陀池から登山姿を見上げていました。リベンジのつもりで参加した訳です。リーダーの小林香織さんが大鍋をかつぎあげ支度から片付けまでして下さり東北方面の方々共々の協力感謝です。帰路は横岳焼森経由、駒草が咲いているとの情報があり期待に胸をふくらませ、登りも下りもなんのそので、ついにヤッター！駒草達と出会えた訳でした。シャッターを押すこと押すこと、きつと良い写真が取れた事でしょう。その後全員で駒ヶ岳温泉へ、今日の泊りの宿です。その晩は話に花をさかせた事と思います。私は翌日予定があり、温泉で汗をながしてから帰途につきました。思いがけない企画、心も体もエキサイト十分楽しんだ一日でした。九十周年には？かな。

NO. 六 角田山…新潟県

BN 1157 浦部頼之（平成七年文）

県外から、関越自動車道や新幹線で新潟市にむかうと、進行方向左手の海側にふたつのゆるやかな峰が並んで見えてきます。弥彦山と角田山です。

いずれも新潟のシンボリックな山ですが、今回の記念登山では角田山を選びました。

角田山は標高四〇〇メートル少しですが、海からそそり立つ山であり、標高の割りに手が届くがあり、登山道も複数あつてそれぞれ個性的な山の表情を見ることが出来ます。

八十周年記念登山の山を選ぶにあたって、新潟県内にはたくさんさんの候補となる山はありましたが、市街地近郊で高齢者であっても登りやすく、かつ登り応えのある個性的な山となると、角田山は最適だと思います。コースは駐車場が広く、山道もよく整備されているという稲島コースを選びました。

今回の山行は、山田先輩と私浦部で企画し、企画者あわせ五人の参加者がありました。

斉藤先輩、山田先輩、私の妻（OG）と私の小学校三年生の息子です。

当日はあいにくの雨となりました。

社会人となつてからは雨の山行はさけるようになっていましたので、これはこれで貴重な体験です。

参加者みなさんも同じ気持ちだったようで、

雨天でもあまりどんよりした気持ちにはならず、そのうち晴れるだろうと根拠のない楽天的発想で出発しました。

歩き始めると、登山道は想像以上に整備されており、ありがたくも迷惑なコンクリート状の階段がえんえんと続き、ちよつと辟易とします。

そしてコンクリート階段が終わると、これも想像以上の急登が我々をまちかまえていました。

もしかしたら、参加の皆様は、想定と違うと思われたかもしれません。

しかし、我々はワンダーフォーゲル部 OB であり、立派な大人です。

そこは、愚痴も弱音もはかず、淡々と登り続けて、ようやく見晴らしのよいお堂につきました。山頂ではありませんがここが今回のコースの一番の展望ポイントでした。

角田山山頂はなだらかで広々としています。がほとんど展望はありません。

そこで、ここから一応は山頂を目指し展望のない三角点の前で写真撮影をし、再度この眺めのよい場所にもどり長めの休憩をとりました。

ただ残念ながら小雨はやまず、展望ももやがかりあまりよくはありません。

しかし一方で、気温はすずしく登山者もありおらず、静かな山での時間を過ごすこと

ができました。

帰りは小雨のなか一気にくだり、近くのワナナリにある温泉施設に入浴しました。

すると、お約束のように雨はやみ晴れ間が見えてきました。

残念ながら山での展望はありませんでしたが、久しぶりにワンダーフォーゲル部時代のなつかしい話をしながらの登山は、なかなか楽しいものでした。

参加の皆様もこれを機会にまた、いろいろな山に登ってみようと思われたのではないのでしょうか。

今回の記念登山を計画し、準備いただいた皆様には心から感謝申し上げます。

また、お忙しい中、つたない企画にご参加いただいた、斉藤先輩、山田先輩ありがとうございました。今度は晴れを選んで県内の山めぐりをしましょう。

NO. 七 鋸山…千葉県

BN 871 平田正博（昭和五十五年政経）

霧雨の一日だった。

この日の為にご参集戴いたバックルナンバー二九九大内善一 OB、三〇一小宮盛治 OB、八五八遠山高廣 OB には申し訳ないくらい展望が何もなかった一日のご報告です。

鋸山という山は文字通り全身に歴史を刻みこんでいるような山で、かつて山中の石切場で働いている人々の情景が霧の中に彷彿と浮かんでくるような、ある意味ロマンチックな場所でもありました。

内房線浜金谷駅に集合ののち、あまた多数大勢の千葉県在住 OB を代表して 4 名で山頂を目指すべく歩き始めたのですが、行けども歩けども何も見えず、無展望。救いは大先輩お二人に当時のワンダーフォーゲル部の思い出話、草津山荘建設や故鈴木監督のエピソードなど時代を跨いでの大変にまた色々な意味で面白いお話を聞かせて戴いたことでした。両先輩のご卒業なさったところに産まれた者として将に戦後の遅い時代に思いを致すひと時でありました。

山を下りて出発地の浜金谷駅そばの旅館で温泉につかり、懇親会となりましたが、差し入れの焼酎に心地よく酔いが回り、帰りの電車で寝過ごしそうになった人もあったとか。

この温泉は久里浜―金谷のフェリー乗り場まで歩いて行ける距離ですので、フェリー、ロープウェイ、山、温泉、電車と変化があり、老若男女それぞれがそれなりに楽しめるスポットでもあります。

また、嬉しいことに NO. 九五一高野万智子 OG から千葉特産ピーナッツとお酒の差し

入れも頂戴いたしました。
 ということでワンデルングも無事に終わりましたことを何よりの慶びと致しましてご報告いたします。

NO. 八 鈴鹿御在所岳…三重県

八十周年記念ワンデルング報告文

BN 1120 天野敬之（平成五年政経）

日時 平成二七年八月二十九日 土曜日

場所 鈴鹿山脈 御在所岳↓天候不順により変更

名古屋市内にて 懇親会を開催

参加者 四三八 伊藤 新吾

四七七 天野 俣明

六一二 山内 利人

六八二 森田 峰彦

七五三 小松 宏之

九〇六 石田 猛

一一二〇 天野 敬之 以上七名

敬称略

当日朝集合時間ぎりぎりまで登山を検討いたしました。東海地方を襲った暴風雨・警報発令により、残念ながら大事な山として登山を中止いたしました。

あきらめきれないワンダラーは当日十七時半から、名古屋市内において場を懇親会に代えMWV80周年を違う形で祝いました。

会場にはMWV Tシャツを着用し、明治大学の幟を持ち込み、壁には登頂予定でありました御在所岳山頂風景を超拡大し貼り付けました。

未練は大きかったです。登頂の雰囲気味わいながら、近況報告、部活談義におおいに花が咲きました。

秋のよき日にリベンジ登山を誓い、短時間ではありましたが、内容の濃い懇親会となりました。

NO. 九 矢倉岳…神奈川県

MWV&なため会ジョイントW

二年 奥山 昂

今年創部八十周年を迎えたワンダーフォーゲル部だが、それを記念し、OBであるなため会の方々と合同の記念ワンデルングが開催されOBの方々と一緒に山に登るという機会に恵まれた。普段、現役とOBとは一緒に山に登ることはなかなかないためとても貴重な

体験となった。今回登った矢倉岳は標高が比較的低く、また天候に恵まれたとあって秋を感じられる大変楽しいワンデルングであった。また、先発隊が山頂で作ったカレーはおいしくて、OBさんにも好評であったのでよかった。

今回、A班は道に迷うことが少しあり、OBさんに教えてもらって進むということもあった。OBさんでもしっかりと読図をされていて読図力の高さを実感したとともに、我々も机上登山など下見を普段の合宿でもしっかりとしていきたい。また、体操だがOBさんにあわせてもつとゆつくりやるべきだったなと感じた。このように今回学んだことも多いのでそれらを今後の合宿にいかしていきたい。

さて、今回OBさんと一緒に山に登りお話しする機会もあったが、なんでもご存じで、これまでOBさんに抱いていた印象ががらりと変わり、今まで以上に親しみを感じる一方、偉大さも実感させられた。ただ現役でほとんどOBさんと話していない人もおりもつと交流しなかったなというのが正直なところであった。ただ、OBさんが現在どのようなことをされているのか少しでも知ることができ、よかった。さらに今回、山頂直前の校歌斉唱においてだけ現役とOBさんと一緒に歌を歌う機会があったが他にも、なためやMWVマーチなども歌う機会があればよかったかなと感じている。

最後に矢倉岳頂上で現役、OB関係なく80周年記念のTシャツを着て撮った集合写真が個人的には印象的だった。将来、自分にも今度はOBという立場で現役と写真を撮る機会があればなど感じ、この部の節目の年に現役としていられることに嬉しさを感じた次第である。

最後に、今回参加して、OBの方々、そして現役のみなさん、お疲れ様でした、そして、ありがとうございます。

三年 落合裕太

I

感想文を書くこうとして、しかし書き倦^{あぐ}ねていたとき、ふと机の横に積んである本の山に目をやると、随分前に買ったきりの若山牧水の歌集があった。手に取ってパラパラと眺めているうちに（歌集など、たいていは流し読みで済ませるのが常だ）いつの間にか読み耽^ふつて、牧水の山河を分け入っている自分が見えた。

この国の山低^{かきさき}うして四方^{よも}の空はるかなりけり
鶺鴒^{かきさき}の啼く

わがこころ青みゆくかも夕山の木の間ひび
らし声断たなくに

海の声山の声みな碧瑠璃^{へきるり}のそら天に沈みて
秋照る日なり

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の国を旅ゆく

独り居て見まほしきものは山かけの巖が根
ゆる細溪^{ほそたに}の水

あいにく矢倉岳に関する歌は見当たらなかったが、一生を漂泊に過ごした牧水にはやはり山の歌が多い。しかしどうも彼にとつて旅とは「つくづく寂しく、苦しく、厭はしく思」われるものだったらしく、「何の因果で斯んなところまで出てく出懸けてきたのだろう、と我ながら恨めしく思はる時がある（草鞋の話 旅の話）」そうだ。しかし続けて牧水はこう書くのだ。「それでゐて矢張り旅は忘れられない。やめられない。これも一つの病気なのかもしれない」と。

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国
ぞ今日も旅ゆく

II

彼の壮絶な人生とは当然比すべきではないが、この旅への実感はワングルの一部員である私としても、かなり共感のできるものだ。一体なんのためにこんな奥深くまで進むのだろう、と恨めしく思う時も確かにある。しかしこのような、決して楽では無い山行こそがいつまでも記憶に残っているのもまた、事実なのである。OBさん方に思い出のある合宿

を伺うと、やはり辛い体験をした山行のことが印象的だったらしい。「あの頃は合宿で山道なんか歩かなかった。4泊5日いつまでも藪漕ぎで進んでいったヨ」「山用品なんて今と違って単純だから毎回荷物が30、40kgにもなっていた」「北海道の合宿の際は初日から雨が降っていてどうにも困ったねえ」。いくら装備が改良された所で、やはりワンダラー達の悩みの種が今も昔も、移り気な山の天候であることには変わりがないようだ。

降るべくは降り照るべくは照りいでよ今日の曇はわれを狂はしむ

III

それでゐて矢張り山は忘れられない。やめられない。現にこうして現役、OBが揃って矢倉岳山頂の、四望何の遮るものもない浩浩たる眺めを見に來たのだった。

山行中はみなさん健脚で、見落としそうなほど小さな花にも気付いて、しばし一緒に眺めて見たり、安曇節を現役が1番を、そして2番、3番をOBさんが一人ずつ歌ってくださったりした。山の中を歩いているとおのずと先輩方の後ろ姿や表情から、そして私たちが現役も同様、何かある種の清爽の気が漲って行くのを感じていた。山の空気を吸い、班の人々と語らい歩むことによって、自らの内面が満ち満ちてゆく。それこそが山の恩寵というのか恵みなのかもしれない。

我が若き胸は白壺さみどりの波たちやすき
水たたへつつ

IV

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさ
びしさに君は耐ふるや

我々はこれから、かつて先輩達が歩いた
山の道を訪ねてゆくのだろう。道というのは
一人の名も知らない誰かが、さびしさに耐え
つつ歩いて初めて出来るのである。そう考え
て牧水の歌集を読みつつこの日の山行を思い
出すと、案外山にはどこことなく人の気配とい
うものが漂っているのではないかと、感じら
れて来る。まだ見ぬ山にも、行けばきつとか
つてのワンゲル部員達の背中があるのではな
いだろうか。

終りたる旅を見かへるさびしさにさそはれ
てまた旅をしぞおもふ

三年 松井遥奈

今回はいつもの山行とは色んな意味で違っ
たので新しい発見が多く貴重な体験になった。
今回の山行では手白小屋を建てたくらいの
年代のOBさんもうらっしゃって、今まで心
のどこかであの手白小屋を学生が建てたなん
て信じ切れていない部分があったが、直接そ

のくらしい年代のOBさんと会ってみることで
本当にそうだったのだと実感できた。実
際、ちょうど建てた年代のOBさんがいらっ
しゃっていたのかは分からなかったが、建て
たときの話を聞いてみれば良かったと後悔し
ている。私は今年度から本格的に手白係とし
て活動することになるので積極的に手白小屋
を訪れ、大切に守っていきたいと思う。

今までにも、私は丸正の下見や道志村の
リーダー合宿に行ったので監督やコーチとお
話する機会には恵まれていたほうだと思っ
た。毎回OBさんとお話するたびに、OBさん
のワンゲルへの強い思いが伝わってきて、ワ
ンゲルが80年も続いているのは今までの先輩
方の努力のおかげなのだと思える。この
部活も、手白小屋のように目に見えるもの
ではないが、同じように大切に守っていきた
いと改めて感じた。

四年 由水雅也

MWV創部八十年を記念して、我ら現役と
OBOGの先輩方と一緒に山に登るという企
画は、去年の十一月だったと記憶している。
企画の初期では、富士山に登るといふ企画が
立ち上がったが、時季や開催規模など様々な
要素を考慮して断念した。そのような中で、
新しい企画を練るべく本を読み漁っていた折
矢倉岳のページに目が止まった。その本によ
ると、全方位から眺望が望めるというのであ

る。「ここに行くべきだ。」こうして企画が動
き始めた訳である。

八十周年Wの一ヶ月前、尾崎コーチのアド
バイスもあり、矢倉岳周辺の下見に出かけた。
その日はシルバーウィークの中日でもあり、
周辺のスポットも随分と賑わっていた。その
日は山頂こそ行かなかったものの、足柄万葉
公園はバードウォッチング目当てに多くの人
と車でごった返していた。それだけに、紅葉
のシーズンに八十周年Wを順調に行えるかど
うか、不安があった。

そして当日。残念ながら、私は矢倉岳で昼
食を用意する班に参加したため、じつくりと
OBOGの先輩方とお話することができな
かった。しかし、過日鈴木正彦OBがアップ
ロードして頂いた動画を拝見した。動画を見
て一番驚いたのはそのベースである。計画当
初は、流石にベースが遅くなるのでは、と思
案していたが、その考えは見事に吹き飛んだ。
ベースが予想以上に早く、驚いた。実際、山
頂には所定より三十分早かった。

山頂では、黒毛和牛を使用したビーフカ
レーを作って振舞ったが、OBOGの先輩方
からも好評のお声を頂き、現役としても一安
心した。また、矢倉岳山頂で明大ワンゲルの
現役・OBOGが一堂に会している様子はま
さに迫力ある様子であったし、企画した私に
とっても感慨の思いでいっぱいであった。

この場を借りて、参加していただいたOB
OGの皆様、本当に有難うございました。

NO. 十 吉野ヶ里遺跡周辺…佐賀県

夏の夜の夢

(M・W・V八十周年記念ワンデルング
九州・山口ブロックに参加して)

BN 794 光浦 毅 (昭和五十一年商)

夏の名残りをまだ感じさせる快晴の下、各地から様々な年代のOBが佐賀県神埼へと集り、温泉入浴、宴会・野外での二次会、翌日の記念ワンデルングと、楽しく二日間を過ごしました。しかし楽しい時間は、あっという間です。別れもすぐ訪れました。

まず宴会後、浜田先輩が、「明日も仕事だから」と言い残し、目の前で機関車ハーマスに変身するや否や、鋭い汽笛一声と共に、銀河鉄道に乗って北九州へ帰られました。とても八十二年前製造とは、思えない堅牢な車体とお見受けしました。

翌朝には、鷺津先輩が、翼を大きく広げ「さらばじゃー! いざ薩摩へ」と一言発するや天空へ飛翔し南へ飛び去られました。江口先輩は、最後に「JMN」と大きな声で言われたので何かいな? と思えばすかさず「じゃーまたね」と解説をしつつ、爆音を轟かせ赤いワーゲンで颯爽と帰られました。その後、「今宵は、熊祭り」と聞こえたような気がするのので振り返ると、そこには村山君がいて本当は、

「今日は、小城ようかん祭りの手伝いやけん」と言うローカルな理由で帰って行かれました。なんでも見た目で理由を判断しては、いけないですね。又、宴席で怪しげなマントの下から、当時のユニホーム、飯盒、ポリタン等次から次へと懐かしい物を魔術のように出現させ皆を喜ばせた高取君が、最後には、大鍋を出して、正部員養成の時のカレー鍋の残りですがと、皆に振舞った時は大変驚きました。

恐る恐る食べてみたのですが、そのうまい事一晩寝かせるとおいしくなるカレーが、三十年経てばさらにおいしくなるのは、当然です。しかしながら物持ちの良いのには、感心します。又、「何か面白い趣向を」と事前に課題を出していたら、当日薪を担いで来て、しかもそれを燃やせる、山奥の草深い場所にあるスナックを見出し、しかもその脇で焚火をする許可まで得るといふ異能ぶりを発揮した佐々木君等、今回の企画・運営の中心となつて活躍された六十一年・二年卒の皆も、地元の名物「神埼ソーメン」を食べて帰るという事で別れました。そして夏の午後の陽光の中に全員消えていきました。

又、元の一人になつてしまいました。ふと見ると、昨夜のスナックの女主人とホステスさんが、買い出しに行くのでしょうか目の前を歩いていきます。後姿を見たら、大きなしっぽがはみ出していました。「やっぱり!」

見上げると秋の兆しを感じさせる空が広がっています。もはや点になつている鷺津先

輩は、「チエスト!」の気合いと共に、日航機を追抜くところのようです。

クラブを卒業して早四十年、過ぎ去つてみれば夢のような氣もします。この二日間も夢の続きだったのかもしれない。ひよつとするとこの記憶も夢の中の事なのかも……。

同じクラブで過ごした縁で、生まれも育ちも違う方々と昔話に花を咲かせる事が出来る幸せ、これも連綿と「M・W・V」を支え続けて来られた歴代の大学関係者・OB諸兄のご尽力の賜物であると感謝をいたしております。又、このような機会を与えて下さった僕の同期の濱田君を始めとし、東京本部でこの度の企画発案及び実務を担当された委員の皆様、本当にありがとうございます。この場をお借りして御礼申し上げます。

NO. 十一 蒜山高原…岡山県

同じ飯盒の飯

BN 860 谷脇嘉徳 (昭和五十五年商)

卒業してから早三五年が経とうとしている。その間、順風満帆には程遠いながらも、仕事に励み、家族に人並みの暮らしをさせることができた。ただ、その時々で、悩み、苦しみ、眠れぬ夜も少なからずあった。そして、創部八十周年記念中四国ワンデルング。ある先輩がおっしゃった。「この部が私を育ててく

れた。私の礎はこの部にある」。この言葉を聴いた時、この先輩と私は同じ飯盒の飯で繋がっていると強く感じた。そして、改めて意を強くした。これからの人生、多少、伏し目がちになることや、目をそらせることがあつたとしても、前だけは向いて歩もう。なぜなら、それがこの部で教えられた私の心の礎であるからだ。私にとって明治大学ワンダーフォーゲル部とは、そういう存在である。

NO. 十三 草津温泉芳ヶ平…群馬県

創部八十周年を

草津温泉と芳ヶ平から

私たち「海千山千会」は祝います。

BN 598 長侶栄喜（昭和四十一年商）

今年の夏は八月中旬からその輝きを失いました。九月に入り、秋雨前線が日本列島に張り付き毎日が雨模様。私たちの期待のバルーンは後日知ることになる「東日本豪雨」により一突きであつさりと弾けてしまいました。被災者の人々には誠にお気の毒な事でしたが、被災地の方々を思えばおこがましいことです。芳ヶ平に足を踏み入れることなく草津を後に帰途にむかったときは私たちも全く被災者の気分でありました。台風十八号影響下の中で行動しておりました。

その九月八日九日の二日間を簡単に振り返ってみます。八日（火）はすでに草津は雨の中でした。八人のチームでその日は今宵の宿「草津ホテル」に予定通り午後四時に到着。学生時代から一度は泊まっていたと思った百年近い歴史を持つ宿で露天風呂からの雨模様もこの時点では余裕をもって楽しんでおりました。宿の食事処での宴会は八十周年記念旗のポスターを壁に貼り、八人揃つての記念写真、学生時代の話には笑いもありました。が、さすがに翌日朝方の時折の強い雨には幾らかの動揺が走りました。それでもあり得ないはずの好転を期待し、全員お揃いの記念ティシャツを身に着け代替案の渋峠から芳ヶ平往復に向うため八時半、宿を後にしました。私が運転する八人乗りのボックスカーは直ぐに雨の中、緑の広がりを見せる天狗スキー場や御成山スキー場への木々の間を感傷深く右に左にとハンドルを切りながらロープウェイ駅の雨に煙る索莫とした景色に到着。このあたりから雨は一段と強まり、左手の壁をこじ開けるように存在する大きな石で埋まる沢すじは、泥を含んだ真つ茶な水が滝のごとく流れ落ちて雨量の多さが明らかです。山田峠に至っては激しい雨に視界も利かず、加え、強風に揺さぶられ、今回は芳ヶ平をあきらめざるを得ませんでした。それでも渋峠で記念写真をと挑戦しましたが、ものすごい雨飛沫を浴びるのみで一枚すら撮ることかなわず、草津へ戻ることになります。ラムサール条約地

域のチャツボミゴケ公園から平兵衛池巡りを次の選択と考え公園管理事務所に携帯で問い合わせると、中之条地域が土砂災害警報下にあるということと車道、歩道を含め周辺地域も強風豪雨の悪環境にあるということでこれも断念せざるを得ませんでした。残るは「西の河原」の露天風呂で全てを洗い流すのみと立ち寄るも、強雨下の露天風呂では風邪でもひいてはかなわないとこれも駄目。ダメだし連発で今回のワンデルングは終わってしまいました。本当に残念でした。

それでも昭和の温泉の町、草津の思い出を探すべき、ガーデンハウスの周りをうろついて草津山小屋の面影を追いました。大阪屋の松の木と提灯は昔ながらに我々を手招きしているようでした。公共施設も街並みも整備され、今や、おしゃれな「リゾートタウンの草津町」。昔を思い出しながらの時間を仲間たちと共有できたことには大いに満足でした。長い助走の末この企画も終わりました。既に古希を超えた私たち、次の周年記念に健常者として参加できるかどうかを考えるとこの八十周年を同期の仲間たちと強く心から祝いたいと思っておりましたから。

さて最後に、今回の私たちの同期からのコメントを紹介します。

●楽しい温泉旅行を満喫しました。ありがとうございます。台風の影響で山行はできませんでした。同期の皆さんとゆっくり語り合えて良かったです。草津十五時のゆけむり号バスで新宿に

十九時二十分に着きました。バスの中でリベンジを考えました。十月一日〜三日・日程変更可。賛同の方と一緒にしよう。(五九四・秋元道別) ●挑戦者の皆さん、本当にご苦勞様でした。山は動きません。次回は何とかして参加したいと思います。(六一〇・石田正) ●新人歓迎Wで入った明治大学草津山荘と草津温泉街。五十二年前の面影を探してのW、様子はすっかり変わっているが昔の姿が甦る。同行のメンバーも当時と変わらず、暴風雨で芳ヶ平は見送ったが、心豊かなW!また訪れよう。(五九七・大洞聡) ●皆さん、悪天候の中本当にご苦勞様でした。小生も参加の予定でしたが検査入院のため日程がダブリ皆さんには申し訳なく思っております。又残念な思いをしております。八日九日は長野と群馬の県境あたりにも大雨警報が出ていたので心配していました。八日は寝つきが悪かったよ。九日昼過ぎ電話で目的地のことは断念したとの返事でした。無事で安心しました。さすがMWV優等生、天候の判断を勇氣ある撤退に敬意を表します。(六〇五・吉池格) ●長侶、先達さん厳しい状況の中お疲れ様。目的地「芳ヶ平」へは台風崩れの激しい雨風で残念ながらたどり着けなかったが、今回参加出来た者、出来なかった者、この様な状況だからこそ「MWV80周年記念」を祝う気持ちが洪峠の風状態の中で結集したように思えた。小生の大好きだった「草津の山小屋」の跡地と思われる場所(向いの中学

校はないが横にガーデンハウスの看板があった)を通過した際、いくつかの記憶が懐かしく、ほろ苦く甦った。それは入部して一か月、上級生を介してか話せなかった「天皇陛下」みたいなPリーダを「各班リーダ集合!」の一言で集めてしまう「陛下」より偉い人がMWVにいらつしやる事に驚いたこと、そして、先輩に連れられて、風呂上がりの棒状に凍り付いたタオルをもって雪に埋もれた夜道を歩いたことです。続きはまたの機会に取っておきましょう。帰路、出発地の飯能に着く頃は青空が広がってきて、やれやれこれで電車に乗って帰るばかりと思ったら八王子行きの八高線が多摩川の増水で不通。何とかその日のうちに帰宅できたが何事も最後まで油断してはいけないという「教訓」にも満ちた「山行」でありました。皆さんありがとう。(五九九・清水邦彦) ●海千山千会を代表され参加された八人の皆様、ご苦勞様でした私も今度の飲み会は参加させて頂き、今回の状況を伺わせていただくのを楽しみにしております。(六〇七・伊丹直樹) ●同期会企画Wは、持病になった心臓の負担を考えると無理かなと躊躇したが、今回は思い出の地である草津でもあり、思い切って参加しました。参加して皆と素晴らしい思い出を今回も共有できたこと本当に良かったです。(六一二・山内利人) ●MWV八十周年記念として海千山千会が企画した草津温泉と芳ヶ平散策に参加しましたが、八日、九日特に九月八日は朝から土砂

降りでした。当然チェックアウトの時間を延長し温泉と酒を楽しむのも良いと思っていましたら、さすが公式Wとなるとワンゲル魂が優先され八・四五分ホテルを出発洪峠芳ヶ平へ向かうも自然にはかなわない、強風と土砂降りで洪峠より草津に退却を余儀なくされる。懐かしの草津をイメージするも全く変わってしまったている。ちよつびり歩いてみたかったな。(六〇一・池上勝彦) ●あの激しい東日本豪雨の中のワンデルングに参加された方々本当にご苦勞様でした。小生は仕事の為に不参加で何もお手伝いできずごめんなさい。次の機会には参加します。(六一三・片山直文)

この感想文に、参加できなかった上、土屋、難波、山田、我らの女子会、田中、川井、菊池、文章でのコメントを紹介叶いませんでしたが、皆一様に同期会W企画を喜んでくれました。心はいつも既に鬼籍に入った大江、出口、初沢を含めた二十名の同期会、又いつか一緒にWできると思うと頑張れます。元氣にこれからもMWV学生諸君を、なため会を、そして自分たちを、応援していきたいと思っております。

NO. 十四 東海道品川宿…東京都

東京都内最高峰の

品川富士に登ろう！

BN 625 菅野隆夫（昭和三十八年商）

我ら渡鳥十四名は八月二十九日十一時、京急本線北品川駅に集合。小糠雨のなか品川富士（富士塚）登頂目指し元気に出発した。

江戸時代、江戸の町の中に数多くの富士塚が築かれて富士塚登山が流行った。これは富士山信仰として富士登山と同様のご利益があると、されていたからであり、今も多くの富士塚が都内各地に残っている。

品川富士は品川神社境内にあり標高が十五M（品川富士のみは高さ約五M）。今でも毎年七月一日には山開きが行われており都内では最高峰とされている。

雨は昼前に上がり渡鳥たちは旧東海道品川宿本陣跡など名所旧蹟を巡り、途中の荏原神社に参詣して目的の品川神社に到着した。神社に登る大きな石段の前に立つ鳥居の柱には上り龍と下り龍が巻き付き「双龍の鳥居は東京に三か所しかなくその中で品川神社が一番古い」との鈴木の説明に耳を傾けた。

双龍鳥居をくぐり急な石段を上がり石段途中の登山口へ。いよいよ登頂開始！二合目三合目と登って五合目から急坂が続き八合目か

らの鎖場を越えて頂上に到達した。山頂で全員八十周年記念Tシャツ姿で木島持参の超特大横断幕を揚げ万歳三唱して記念写真撮影。

下山後、品川神社と浅間神社に参詣。境内に陶製の狛犬が鎮座しており、鈴木によれば「備前焼の珍品で文政十三年（一八三〇）造」とのこと。

旧東海道の南品川商店街に戻って猪狩の案内で親睦会場に行き会食。中田の発声で乾杯の後生ビールやワインで名物肉料理に舌鼓を打ちながら歓談し、名残りは尽きねど再会を約して解散。渡鳥たちはそれぞれの寢座に飛び立って行った。

「双龍の 鳥居をくぐり

品川の 富士山登る 渡鳥たち」

品川富士登山 参加者（十四名）とコメント

BNBNBN
487484483
鈴木康弘 羽部 隆
中田 弘

『一言』

暑くなく調度良い天候の中、楽しいひと時でした。木島が造ってくれた横断幕は最高のパフォーマンスだ。

BN 490 長嶋 圀好

私は、十五キロ超の体脂肪の着ぐるみつけての本格登山は無理、ただど愉快な仲間達と品川富士塚に登頂（？）後、旧東海道品川宿の

街並みを散策し楽しい一日を過ごす。幹事さんたちに感謝

BNBN
501494 木島敏夫
前田芳弘

辰巳午の会も後期高齢者に突入しました。老体に鞭打って有志集い品川富士に挑戦。一〇五合目まではスイスイ、六〇八合目は急登、頂上までは鎖場。頂上にて万歳三唱。ワンゲル万歳。

BN 504 平山 孝

「富士登山バンザイ！」

焼津の西村さん、前橋の笹治さん、八王子の高橋さん、羽部、中田、鈴木梓、長嶋、前田、山本ブーカ、菅野、八十周年記念の横断幕を作ってくれた木島、全員無事山頂へ登れてよかった。案内人地元品川の猪狩君、現役神内さん、本当にありがとう、思い出に残る、楽しい一日でした。

BN 506 西村 偕子

「店先で畳を編み魚を捌いている」
「七福神の杜も地元の方で守られている」
「品川宿には懐かしい匂いがありました」

BN 507 笹治 禮子

「品川の富士に集いてたしかなり
我等古希の身素晴らしきこと」
「木島氏の横断幕その心意気に感涙し

富士山踏破後のビストロ最高

狂歌

「チビ管と 呼ばれ続けて五十年

今日登るチビ富士 五メートル」

「備前焼の狛犬見つけ珍品!と

威張る梓は超珍品」

BNBN
625513
山本 務
管野隆夫

BN
764
高橋寿子

ワアーイ ヤッター はじめて フジ山に
登ったワ 十四名の参加者が、八十周年T
シャツを着て キネンの写真を撮りました!

BN
835
猪狩 稔
現役三年生 神内亜美

ワンデリングコース

北品川―旧東海道品川宿散策―品川神社
(品川富士登山記念写真)―荏原神社

―青物横丁(昼食)―

お食事処

ビストロ ラバンドール

品川区南品川二―十四―十四

〇三―三四五〇―一八七六

NO. 十五 金峰山…山梨県

五匹のオッサン登山隊が行く

―創部八十周年記念オールなため会

ワンデリング金峰山山行紀―

八月二十九日に創部八十周年記念事業の
「オールなためワンデリング」企画として、
昭和五十六年度卒業の「郷路会」同期の田邊
佐藤、山下、永井、藤原の「五匹のオッサン
登山隊」が金峰山を登ることとなった。田邊
が報告する。

八月二十八日に、佐藤の車に永井と山下が
便乗し、田邊と藤原はそれぞれの愛車で深夜
の高速を疾走して深夜十二時頃、中央高速の
須玉インターを降りてすぐのコンビ二駐車場
に三台が集まった。高速道を走行中は雨がと
ころどころで降ってはいたが、コンビ二で降
りたときに雨はやんでいた。当日の天気予報
はくもり一時雨で、午前中はくもりという予
報ではあったが、見上げると、いつ降り出し
てもおかしくないような星のない真っ黒な空
が広がっていた。

コンビ二で明日の食料と寝酒用のビールを
買い、山下は田邊車に乗り換え、佐藤車を先
頭に三台が連なって瑞牆山荘の駐車場を目指
した。山荘への道は次第に狭くなり、カーブ
も多くて運転に苦勞する。それでも結構なス

ピードで快調に飛ばしていた先頭の佐藤車が
突然止まった。何事かと思っていたら、車の
サーチライトに照らされて、大きな鹿が三頭
道路を横切って行くのが見えた。後で佐藤に
聞くと、「あいつら道路の脇でジッと見てん
だよ。気味悪いゾー。」とか。とりあえず鹿
と衝突しなくて良かったのである。鹿と心中
はご免なのである。

コンビ二から約五十分ほどで瑞牆山荘の駐
車場に到着した。駐車場は無料で約百五十台
が止まれるほどの広さがあり、ところどころ
に五、六台の車が止まっていた。仮眠中の方々
に迷惑がかわらないよう、駐車場の片隅に集
まり、簡単に缶ビールで乾杯した。

「俺この間、OB会で妙義山に行ってきた。
もう足がガクガクだったよ。」と山下。

「ふーん。」

「俺も先週八幡平を縦走した。天気が悪くて
大変だった。」と永井。

「ふーん。」

「俺は夫婦で最近会津磐梯山に登った。天気
が良くて最高だった。」と俺。

「ふーん。」

「俺、この間槍ヶ岳に行ってきたよ。」と藤原。

「おお、すごい。」

「俺も最近槍ヶ岳に行ってきた。」と佐藤。

「おお、それまたすごい、凄い。」

というように、登った山のインパクトは違う
ものの、それぞれの山談義を小声でしつっ
、更に夜は更けていった。

缶ビールを一本ずつ開けたところで、出発は五時三〇分ということになり、それぞれの車で仮眠することになった。永井はイビキがすごいので、医師からイビキ防止用装置（本人は「生命維持装置」と呼ぶ）をつけることをすすめられたとか。一緒に寝る佐藤は大丈夫か、などと思いながら久しぶりの寝袋にもぐり込んだ。すでに時計の針は深夜の一時を大きく過ぎていた。

翌朝、というより寝袋に入ってから四時間後であるが、車のドアガラスをコツコツと叩く音で目が覚めた。顔を上げて薄眼を開けると、そこに佐藤の顔があった。時計を見ると五時を過ぎており、五時三〇分には出ようと言っていたので慌てて起き上がる。どうやら雨は降っていないが、空を見上げるとどんよりした雲に覆われていて、いつ降ってもおかしくないような空模様であった。急いでザックを用意するが、コンロやコッヘルは藤原が持っていくというので車に置いていくことにした。それを見た佐藤が「天気予報が雨だからさあ、まさか登るとは思わなかった。コップも持ってきてねえよ。」とかいう。その隣で永井が煙草を吸いながら「ダメだ。すつげえ眠い。」とつぶやく。このオッサン登山隊はたして大丈夫かと少し不安になる。

トイレや着替えなどでモタモタしていたら、結局出発したのは五時五十分頃であった。歩き出した時、まるで出発の合図の用に遠くで甲高い鳥の声がした。

駐車場から樹林帯の中を登山道がのびており、現役時代から読図が得意の藤原を先頭に五匹のオッサン登山隊が歩き出した。地図を見ていると、佐藤が「お前地図読めるの?」と聞くので、「地図は読めなくても見るだけならね。」と謙遜して言ったつもりだったが、良く見ると磁石の向きと地図がさかさまである。どうりで変だと思った。見られないようにこっそりとひっくり返す。

樹林帯を抜け、途中で林道を少し歩くと「富士見平小屋」への標識と登山道入り口があり、いよいよ本格的な登山の開始である。

昨夜の雨でところどころがぬかるんでいる。水たまりを見た永井が「こういう水たまりで靴が汚れると気分がへこむわ。」とつぶやくように言いながら、靴がぬれないように器用に水たまりのへりを歩く。しばらく歩いていると少し雨が降り出した。まだ小雨であることと、樹林帯のおかげでそれほど濡れないで済みそうだ。カッパを着るかどうするか迷っていると、永井が小さなかわいい緑色の傘を取り出した。オッサンにはいささか似合わない傘ではあるが、ずっと見ていると目になじんでくるから不思議である。

歩きながら山道の周囲を見ると、高山植物ではなくキノコがあちらこちらに生えているのがわかった。良く見るとキノコだらけである。中には一〇cm以上もあるデッカいキノコが「どうだコノヤロウ」とばかりにそそり立っている。

道の途中で、若い山ガールが「こんなの初めて見た。」とか言いながら、立ち止って大きなキノコを撮影し、その横でパートナーの男性が苦笑いをして見ている。キノコもこれだけ注目されると生えてきた甲斐があるというものだ。

山荘駐車場から五十分ほどで富士見平小屋に到着する。富士見平小屋は地ビールなどもある大きな山小屋である。小屋の前は広く、休憩用の机といすがいくつか置いてあり、雨にもかかわらずたくさんの登山者が休んでいた。昨今の登山ブームということもあり、登山者のスタイルも華やかでカッコが良い。それに比べて我々オッサン登山隊のスタイルはいささか野暮つたい。

「登山は格好じゃないぜ。」とか「ケツ、何つつてもやっぱり作業ズボンが一番だな。」などという会話が何だか空しい。カッパを着ながら「これは一万円以上もするんだ。どうだ。」という話になると、もういささかヤケッパチである。

そんな華やかな登山者を尻目に、カッコをまるで気にしない五匹のオッサン登山隊はまた歩きだした。永井の傘の緑色が、まるでツアーの小旗のように目立っていた。

さらに樹林帯をしばらく進むと、道のところどころに岩場が目立つようになる。小一時間も歩くと視界が開け、大日小屋の上に出た。そこは大きな庭ほどの広さがある草地で、すぐ下に大日小屋の青い屋根が見えた。大日小

屋は現在、無人小屋であるが、藤原が「いつかお世話になるかも。ちよつと見てくるわ。」と言ってカメラを持って下っていく。どうやら小屋の中は、毛布が広げてあったりして十分使えるらしい。

「ただし毛布はちよつとねえ。誰が使ったかわからないから怖くて使えないよねえ。」と、見てきた藤原は苦笑いである。

休んでいる間にも雨がそれなりに降り始め、山頂まで行くかどうか迷う。相談した結果、いつでも引き返せるように、ところどころでOB会が作った記念旗と一緒に証拠写真を撮ろうということにした。オッサン登山隊のモットーは、疲れたら無理しちゃアカン、なのである。

大日小屋からかなり岩場の多い道となる。雨のせいで岩もすべりやすくなっており、やや足腰の弱り加減のオッサンたちにはつらい道である。小屋から三〇分ほど登った大日岩下の岩場のところで全員が立ち止った。

この岩場の少し上段の岩陰に、ひっそりと隠すようにして横幅三〇センチほどの金属プレートがつけられていた。実はこのプレート、三十三年前にこの大日岩下の沢の滝そばに滑落死した同期の戸沢の冥福を願い、取り付けられたものだった。そのプレートの場所まで大きな岩をひとつよじ登らなければならぬのだが、登る場所がなかなか見つからない。よく見ると、腰より少し高いところに少し出っ張ったところがあり、そこに足をかけ

れば何とかなりそうだった。

佐藤がエイヤツとばかりに足を広げ、何とか登ることができた。次に永井が登ろうとするがなかなか足が届かない。「田邊、ちよつと尻を押して。」と言われ、下から押し上げるが身体を支えきれずに背中から落ちてしまった。その様子を見て、他の面々は結局、遠くから回り込むことにした。登ったあと、一人だけ直接岩を登った佐藤は「登れたのは俺だけだな。」と得意満面である。その横で永井が「なんかさ、スッゲー悔しいだよな。」と小さな声で呟いた。オッサンにもプライドがあるのだ。

ここで山下が大事に持ってきた記念旗を取り出し、全員がプレートの前で写真を撮った。雨がやまないこともあり、さて、何となく引き返しても良いか、というムードにもなりかけるが、「せつかくだから山頂まで行こうぜ。」と、一番登る気がなかったはずの佐藤が言うので、その勢いで、これも何となく山頂まで登ることとなった。

プレートのある岩から二〇分ほどで大日岩の分岐に着くが、その途中で、かつて増富温泉に向かう道跡を見つけた。現在はほとんど使われておらず、登山道不明瞭注意の道標が立っていた。滑落死した戸沢はこの道を通り、あの沢に迷い込んだのかもしれない。しばらくそんな話をしながらその道を見つめる皆の目は、三十三年前のあの日、この道を急ぐ戸沢の後姿を追いかけているようだった。し

のつくように降る雨が、遠くを見つめる皆のほほを濡らした。「さあ、行くか。」誰かの声に促され、心の中で戸沢に別れを告げて、また五匹のオッサンは歩き出すのだった。

このあたりから、ところどころ急な傾斜と岩場も多くなり、なかなかペースが上がらない。歩いていると、小学校の高学年くらいの女の子二人を含む四人家族が休んでいるところに出くわした。子供たちも今風の洒落た登山着姿で、将来はきつと立派な山ガールになるのだろうと密かに確信する。休んでいる家族を追いつきながら、「二人ともすごいねえ。オジサンもうヘトヘトだよ。」と子供達にやさしく話しかけるが、彼女らは少しおびえたように隣の親を見るのだった。おそらく、あやしいオッサンに声をかけられたらすぐ逃げろと親や学校から教えられているに違いない。登山家に悪いヤツはいないのだニヤロメ、と心の中で毒づきながら、子供たちには笑顔をさせるあやしいオッサン登山家であった。

駐車場を出発して四時を過ぎ、十時頃によくやく稜線に出る。時々見晴らしの良いところがあるが、相変わらず厚い雲に覆われて展望がきかない。十一時を過ぎて、そろそろ頂上かと思うとまた下ったりする。さすがに足が疲れてきた。前を行く山下も足取りが重い。森林限界を超えてハイマツ林の道を淡々と歩いていると、少しばかり雲が切れ、雨も小ぶりになってきた。いくつ小ピークを過ぎ、いよいよヘロヘロになりかけた時、眼前

にまたひと際大きな岩が現れた。おお、どうやらここが頂上らしい。

その岩をまくように登り切ったところが広場のようになっており、そこが金峰山の頂上であつた。到着時刻は十一時二十五分で、四時間三五分かかつての登頂だつた。その広場のような山頂の左右には大きな岩場があり、右側の岩場の下には、一人一人がぐれるほどの赤い小さな鳥居が立っていた。左側の岩場のてっぺんが本場のピークで、そこに登って写真を撮ったりする。その岩場の下あたりに金峰山山頂の道標があり、その前で記念旗を持って全員で記念写真を撮る。これで今日の本当の目的が達せられたわけである。

鳥居の近くで昼食をとることにした。藤原がザックからコンロとコッヘルを取り出し、インスタントのシジミ汁を作つて各自にふるまってくれた。少し冷えた身体に温かい味噌汁がありがたい。山頂には先ほどすれ違った家族の他に、若者の男女数人のグループもあり、ワイワイと何か楽しそうである。少しバテ気味のオッサンたちの目には、その若さが少しまぶしくて妬ましい。

山頂で五十分ほど休んだが天気回復は望めそうもなく、十二時一五分頃下山を始める。下山は足にかかる負担が大きく、下るたびに膝がガクガクする。山下もかなり辛いようで、時折足がとまる。聞くと、どうも足の裏がつり気味だとか。他の三人はけっこう山を登っている成果かスイスイ?と下つていくように

見える。いやはや、山はやっぱり男の修練場いや、苦行なのである。

少し道の平らなところで一服すると、藤原がアミノバイタルとかいう粉末の健康食品をくれた。飲むと力が出るという話を信じて飲む。甘い味が口いっぱいに広がった。何となく力がわいたようなそうでもないような。藤原のやさしさをもらつてまた下り始める。

下り始めて一時間も経たない頃、いつの間にか雨も上がり、周りを見渡すと少しずつ雲が切れ始めたことに気がついた。ちょうど稜線上の見晴らしの良いところに出たので、そこで少し休むことにした。後ろを見ると、先ほどまでいた山頂も見え始めた。白いカーテンを取り払われていくように周りの景色が鮮明になっていく様子は、まるで映画のワンシーンを見ているようだった。先ほどまでいた山頂やその直下の山小屋がはつきりと見え、目の前には瑞牆山の岩稜が一望にできた。遠くを見ると、浅間山と思しき山容までがくつきりと見える。それは大げさではなく奇跡のひとつ時であつた。皆歓声を上げて写真を撮り始める。登つて良かった。

下を見ると、かなり遠くの稜線上ではあるが、先に下山したあの四大家族が小さく見えていた。子供たちが何事か騒いでいる。彼女らの歓声がここまで聞こえてくるようなはしゃぎようであつた。

十分ほど景色を堪能したが、いつまでも感激に浸っているわけにもいかなかったのでまた下

り始める。少し下ると、またすぐにガスに包まれてしまった。ここからまた淡々と下るしかない。山は登つたら下らなければならぬ。あたりまえだがこれがつらいのである。

「エスカレーターとかエレベーターとかあれば楽だよなあ。」

「ドラエモンどこでもドアで帰りたい。」

「眠い……。」

などと小学生並みの愚痴を言いながら下る。ヘトヘトになりながら富士見平小屋に着いたのは一五時三〇分で、山頂から三時間以上が経っていた。ここで水がなくなり、水場まで汲みに行こうとするが、かなり下であることがわかつて途中で断念する。そんな自分が情けない。

とにかくもう少しなので先を急ぐことにするが、なかなかペースがあがらない。小屋を出て三十分も過ぎた頃、下に駐車場らしきものが木の間からチラチラ見え始めてホッとす。全員が無事に駐車場に到着したのは十六時二十五分であつた。全行程十時間十五分かかつての金峰山登山で、おそらく今日の企画で一番大変な登山だろうと思われた。

駐車場に着くと、着替えも早々に宿に急ぐ。今日の宿は、永井が予約してくれた増富温泉のひなびた旅館であつた。部屋は二部屋あり、喫煙者の山下と永井がひとつの部屋で寝ることにして、もうひとつの部屋を宴会用に使い、あとの三人はそこで寝ることとした。

増富温泉の湯は茶色で、ラジウム鉱泉のた

め湯の温度は低い。その温水ブルのような冷泉に入り、今日の疲れを癒した。その後は広い宴会場で食事となるが、皆、疲れたせいか意気があがらない。食事も早々に宴会用の部屋に戻り、あれこれと雑談しながらまた酒を飲む。

せっかくの温泉なのに一度、だけではもったいないので途中で風呂に行き、部屋に戻ってみると永井が大の字になって高イビキをかいていた。起こすのも面倒なのでほうっておいたら次第にそれは爆音に変わり、さすがにたまらないので佐藤と二人で起こして隣の部屋に移動させた。後で聞いたところでは、あまり眠いので生命維持装置を装着し忘れたそうだ。山下は隣でよく眠れたものである。時計を見るとまだ九時を回ったばかりではあったが寝ることになった。オッサンたちの夜は年とともに短くなるようだ。いつの間にか外は大雨が降っていることに気がついた。

こうして五匹のオッサン登山隊は深い眠りにつき、また次の山を目指すのである。

カスケード山…カナダ

BN 676 野島一雄（昭和四十四年商）

七月十六日からの娘一家とのカナダ旅行に合わせて、創部八十周年記念ワンデリングとしてカスケード山（二九九八M）に登って来た。カスケード山は、バンフの町から北方面

に目を向けるとその雄姿を見ることが出来る、町のシンボルである。

七月二十日六時バンフのロッジから娘と孫二人を置いて娘婿の田邊啓太君と車で出発、途中啓太君の友人のカナダ人のアイバン君と待ち合わせて登山口のマウントノーケイスキー場に向かう。

七時スキーロッジのリフト乗り場の先から林道に入る。カナダでは乗馬によるトレッキングも盛んで林道には馬の落し物があり踏みつけないよう注意しなければならない。

林道をやや下りきった所で立派な橋を渡った所が今日の最低部一五八〇M、いよいよこれからひたすら山頂を目指して老体に鞭打って登るのみである。ジグザグの登りが一段落するとカスケードアムフィシアターと呼ばれる亜熱帯草原（二二二五M）に到着、遙か彼方に山頂が見えて来た。ここから森林限界を超え足元の不安定な岩場に入る。例えるなら夏山の穂高のような感じだが、国内では見たことの無いほどの広大で急斜面のガレ場で目印は僅かにあるケルンのみで、日本の山のようには岩にペンキでべたべたと示していないのでルートを外さないように細心の注意が必要である。岩場に足を取られザレ場では足を滑らせながら喘ぎ喘ぎ山頂右手のピークに辿り着き、十二時三十分ついに山頂に立つことが出来た。山頂からはバンフの町やミネワカン湖、バンフを取り囲むランドル山（二九九四M）やキャッスル山（二七七六M）、氷河で

削られた岩の連峰が幾重にもはるかに連なる絶景が登山の辛さを暫し癒してくれた。三人で記念撮影をし、長い下山を考えると気持ちが悪えるが、今の時期のカナダは夜十時頃まで明るいので景色を楽しみながら歩くことにした。

十七時無事下山、充実した長い、長い一日がやっと終わった。

山に何ら興味の無かったわたしは、何の因果か明大ワンダーフオーゲル部に入部して早五十年近く、気が付いたらこの歳まで細々と



山と関わって来たからこそ娘婿の啓太君と一緒にの時間を共有することが出来た。小4の孫の優河も父親の影響で山に登り始めた。今回は体力的に無理ということで残念ながら一緒に登れなかったが、機会があれば親子3代では是非カナダの山に登りたい。

最後に、わたしを騙すように入部させた某先輩に改めて感謝申し上げます。

私とワンダーフォーゲル

BN 683 横手一男（昭和四十四年商）

私がワンダーフォーゲル部に関わりをもつて五〇年経ちました。部活動は先輩、後輩の縦の人間関係と同期の横の関係があり、その人間関係が人生を豊かにしてくれました。昭和四一年（一九六六）に入部してワンダーフォーゲル部に入部したら、私のクラスの担任の木下勇先生が部長を務めていました。先生はドイツ語授業の合間にワンダーフォーゲル部の活動を話され、自然の中で心身鍛錬の場があり素晴らしい活動ですと強調しておりました。監督は鈴木善次郎氏でした。その年は創部三十周年で東京タワーで記念行事が行われたそうです。上級生になり部活動の仕事も増えてきてOB名簿作成にあたり、木下先生宅へお伺いしてOBの動向を調べることになりました。緊張しながら先生のお話を聞きました。昭和四三年に手嶋健氏（昭和三二年度

卒）がコーチになりました。私の学生時代は当時、七〇年安保闘争で各大学の活動家が運動を起こしていた。明治大学も紛争に巻き込まれ学園封鎖された。機動隊と学生運動家の対立があり、騒がしい時代でした。昭和四五年（一九七〇）に卒業して、同期からOB委員をだすことになりました。OB委員会は前川勤委員長が中心に監督、コーチ、OBが出席して行われました。その頃は神保町の喫茶店「エレガンス」に集まりました。若輩の私も何回か出席しましたが、先輩の話聞くだけでした。昭和四六年から昭和四八年は手嶋健氏が監督で学生を指導し、部長は藤井耕一先生でした。その後、昭和四九年に再び鈴木善次郎氏が監督になりました。OB委員会に監督が若手のコーチを推薦することになりました。吉沢利男OB（昭和四三年度、横手一男OB（昭和四四年度）がなりました。最初のころは吉沢コーチが学生と一緒にワンデルングに参加していました。私は在京活動を指導していました。鈴木監督はリーダーシップについて常に話をされていました。二、安全の確認 三、危険予知 三、信頼を得ること。昭和五〇年に創部四〇周年記念式典が新宿住友ビルで行われ多数のOBが参加しました。昭和五一年（一九七六）杉本主将の時に、六月の新人養成Wで不慮の事故が起きました。在京連絡所に連絡が入り、その日に部長、監督、コーチ、主将が日光へ入り市内の旭館を現地連絡所としました。警察

より連絡があり、林道終点の禁断石に一年生鈴木啓之君の遺体がおろされて、現場に立ち会うことになりました。親戚の方、監督、私が警察の車で向かい悲しい対面でした。投光器に映し出され検死が始まる。日光警察署では部員の事情聴取が始まる。翌日、部長、監督は日光に残り、私は東京に帰り、監督の指示で前川OB委員長に連絡を取りました。その後、OB委員会が大学内で開かれて善後策を検討しました。自然の中に、美しさと厳しさがあり、このような事故が起こらないように事故防止に留意していく活動にしていきたいと思えます。部の運営の要である四年生のリーダー育成する方向で活動していく。昭和五二年藤井耕一部長が勇退し、杉浦忠夫先生が部長に就任しました。昭和五四年、吉沢コーチに代わり浜田稔OB（昭和五一年度卒）がコーチになりました。昭和五六年ごろ、草津白根山荘の老朽化が問題になり、ガーデンハウスの経営者が大学側に要望書を提出してきました。草津白根山荘はいままで新人歓迎W、正部員養成W、スキー合宿を行っていました。新人歓迎Wは富士山の見える場所で行っていました。新人歓迎Wは富士山の見える場所で行っていました。部長が勇退し、坂本清先生が部長、田村敏夫先生が副部長に就任しました。田村先生は商学部教授で私は英語を教えていただき偶然の再会でした。その後、OB委員会が開かれて新山荘の候補地を検討しました。熱心なOBの方々のおかげで南会津の田島町に針生山荘

が昭和六一年（一九八六）一〇月に竣工され、大学の理事、地元の方々、多数のOB諸氏が式典に参加しました。十一月には創部五十周年記念式典が開催されました。昭和六二年より針生山荘は部員の活動の拠点になり、毎年リーダー養成Wの中継点でクビレ田代、花沼湿原コースを通過して奥鬼怒山荘への路になりました。また、冬は、台鞍スキー場でスキー合宿を行い、四年生のお別れ会も針生山荘で行いました。平成四年、坂本部長が勇退し、長峰章先生が部長に就任しました。平成五年（一九九三）十月に奥鬼怒山荘三十周年記念を現地で開催しました。解散後、雪がちらちら降る天気でした。私は新村OB、小林碧OB、吉田修OBと一緒に鬼怒沼く物見山く大清水へと雪の中を歩き、下りは足元が滑りやすく、慎重に進みました。無事に大清水に到着して安心しました。平成六年、鈴木監督が勇退し、浜田稔コーチが監督に就任、コーチは井上堅一OB（平成元年度卒）、宮本裕剛OB（平成五年度卒）がなりました。平成七年十月、日中慶明四大合同Wで谷川岳縦走コースにて日大パーティーの中で明治の堀井正君が滑落して死亡、青木淳君が重体になる事故がありました。日大のリーダー力量が欠落していたようです。OB会の事故対策委員会では部員の援助を決めていきました。十一月に茂倉新道の遭難現場で追悼Wが浜田監督、井上コーチ、吉岡主将代行、部員、私、日大の教職員と部員が参加して行われました。

十二月にOB幹事会が開催され、OBによる四大合W協議会が発足しました。平成八年九月に浜田監督が勇退し、横手一男OB（昭和四年度卒）が監督に就任し、奥倉勇一OB（昭和三十九年度卒）、大村研OB（平成三年度卒）がコーチになりました。浜田監督からの引継ぎ事項は安全ワンデルングの徹底と奥鬼怒山荘の屋根の点検でした。九月下旬にリーダー養成Wを行い、新体制で本多康弘主将以下八名の四年部員が部活動の中心になりました。十月十一〜十三日谷川岳追悼Wを行い、追悼式を土樽の広場で堀井君の兄様、長峰部長、私、浜田前監督、大村コーチ、井上前コーチ、長沢前主将、一色雅男OB、若手OB6名、本多主将以下十六名の部員、日大教職員と部員、中央大監督が参加して行われました。十一月三日、堀井君の実家富山で一周忌が行われ、長峰部長、私、本多主将、卒業生六人、若手OB十二名、日大教職員と部員が参加しました。平成九年（一九九七）四月はリーダー会議で今後の部活動について話し合いをしました。安全の確保と同時に部員の減少により、三Kの見直しを検討し、ドームテントで軽量化、キスリングから縦長の一〇〇Lのザックで背負いやすさを追求する、マキサイトの見直しを検討しました。新人部員の加入に力を入れてOB会に援助をお願いしました。新人十名が入部しました。夏合宿は東北十和田湖で部員十七名が集いOB十五名が参加されました。十月に新体制ですが、三年生が欠落し

ていますので井上博雄主将代行という形で一年間活動することにしました。十月はMWV創部六十周年記念式典が大学会館で開催され大勢のOB諸兄が参加しました。平成十年（一九九八）一月にOB幹事会が行われOB機構改革委員会、山小屋委員会が設置され、部の継続を図るために新人募集の勧誘方法に工夫をする。新人歓迎Wでバスツアーを取り入れてOB会の援助をお願いしました。大学一号館が取り壊しでリパティタワー完成後に十月部室が十号館（法学部校舎）に移動する予定です。私は四月から四年生不在なので部員とともに毎回ワンデルングに参加して三年生以下の育成に努めることにしました。四月新人歓迎Wで我が部の活動を知ってもらっため針生山荘で宿泊して奥日光Wを行う。夏合宿は九州開聞岳で行う。九月リーダー養成Wを行い奥鬼怒山荘に入荘すると台風の影響で雨漏りして畳が濡れていた。写真を撮って体育課関課長に連絡をしました。屋根の吹き替え工事を依頼しました。十月に屋根の工事が具体的になり、私は体育課員一名、施設課員二名、東武建設㈱と一緒に山荘へ下調べに行きました。十一月は針生山荘の点検に体育課員一名と大桃建設工業で修理箇所を話し合いました。リパティタワー二三Fが竣工し、体育課関課長と会い山荘屋根修理の見積もりが一〇〇万円なので厳しい状況との事でした。再度調整してお願いしました。針生山荘は修繕予算がおりたので十二月に工事を進めるこ

となりました。平成十一年四月新人募集を行い、三名が参加しました。山荘屋根修理で施設課員中山さんの話で五月中旬に業者指定することになる。六月施設課員中山さんと会う。手白沢温泉より山荘まで資材の運搬手伝いで延べ人数四十名の依頼があり、修理費用の削減に協力することになりました。七月中山さんより連絡があり、東武建設㈱が山荘修理を請け負うことになりました。改装工事工程表が送られて八月二五日、二七日に資材運搬となりました。手白沢温泉九時集合で五時まで行う。その前に夏合宿が北海道日高アポイ岳で行われました。

その二

平成十一年八月の奥鬼怒山荘の大改装に関して部の要望として煙の処置をしてほしいことを東武建設の方と相談する。善後策をいろいろ検討した結果、換気扇では発電機の電力では不足となり、鳩小屋作成で上に煙を追いつけていく方法を採用した。毎年の防錆剤塗装メンテナンスと三十数年も木造建築で耐用できたのは壁が燻製状態で木が持ちこたえられたと、東武建設の方が話していた。部員の資材運搬に関してOB会より交通費等の援助をお願いしました。八月二十五日に井上主将他部員十三名が参加しました。長峰部長、奥倉コーチ、昭和三八年度卒OB鈴木康、前田、中村、菅野、高橋寿、各OB、杉山（昭和四五年度卒）、諏訪本（昭和四九年

度卒）井上（平成元年卒）各OBが参加しました。資材は手白沢温泉から山荘まで運搬する。二十六日も行われた。山荘の水場を点検して、源頭に行き水道管を調整して水が貫通する。その後、施設課員中山さんより連絡がありまして九月十九日に検査が完了したと報告がありました。改装工事の図面をOB事務局、鹿島（昭和三七年度卒）、前田、杉山各OBに送付しました。九月に南会津でリーダー養成Wを行いました。新主将に北島健で四年生五名の執行部になる。十月十七日に鳩小屋に梯子を設置しに行きました。平成十二年（二〇〇〇）四月新人募集に力を入れる。歓迎コンパには十二名が来たが、歓迎Wには二名の参加でした。その後三名入部した。今年も少人数のなかでの活動となる。夏合宿は北島主将で東北地方田沢湖BCで行われました。小笠原（昭和四三年度卒）、村木（昭和五三年度卒）、清水晴（平成二年度卒）弘美（平成五年度卒）、長谷（平成六年度卒）各OBが参加しました。九月に南会津でリーダー養成Wを行いました。新主将に高嶋章生で四年生三名の執行部になる。平成十三年（二〇〇一）四月、四年生とともに新人募集の方法を検討する。新人歓迎Wに三名参加しました。五月に坂本清元MWV部長先生が勲三等旭日中授章を授与されました。その後六月二十三日ホテルグランドパレスにおいて坂本清先生の叙勲祝賀会が大勢のOB諸兄の参加で行われました。八月夏合宿は高嶋主将

で九州九重高原の筋湯温泉BCで行われました。曾我、小野（昭和三九年度卒）、山本忍（昭和四二年度卒）、行村（昭和五六年度卒）、繁谷（昭和五七年度卒）、野中（昭和五八年度卒）、高取、松尾（昭和六一年度卒）、相川、兼広克、佐々木（昭和六二年度卒）、寺田（平成九年度卒）、井上（平成十一年度卒）、中村宏（平成十二年度卒）、各OBの多数の参加でにぎやかになりました。八月下旬に南会津でリーダー養成Wが三年生一人で四年生二人と私が参加して行われた。厳しい状況の部活動であります。平成十四年四月、川井主将と部員で新人募集の方法を検討する。新人三名が入部してくる。夏合宿は中部地方で川井主将の願望でアルプスに登りたいとの事で比較的危险な場所がないコースを選択させた。BCは乗鞍高原休暇村キャンプ場で行いました。尾崎（平成八年度卒）出浦、松川、川崎（平成九年度卒）、中村（平成十二年度卒）各OBが参加しました。平成十五年四月、磯野主将以下四年生四名で新人募集の方法を検討する。新人五名入部してくる。八月夏合宿は東北地方白神山十二湖で部員十五名の参加で行われました。八月下旬に南会津でリーダー養成Wを私と磯野主将、三年生二人で行いました。十月二十五日、前田OB（昭和三八年度卒）が実行委員長として奥鬼怒山荘四十年記念式典が現地で多数のOB諸兄が参加して行われました。平成十六年四月、末永主将以下四年生三名で新人募集の方法を検討する。

募集時に、のぼり旗四本、旗四本、台二台を購入して校庭内に立てて目立つようにする。その費用をOB会に援助してもらおう。四月下旬新人歓迎Wを飯能巾着田の河原で新入生十名が参加して飯盒炊爨^{はんごうすいさん}を行いました。みんな興味を持って見守っていました。今年の一年生は定着しそうな予感がしました。八月夏合宿は九州えびの高原で行われました。OB会長大善一氏（昭和三十一年度卒）はじめ中村茂（昭和五三年度卒）、長谷（平成六年度卒）、尾崎（平成八年度卒）出浦、松川（平成九年度卒）、藤代（平成十三年度卒）、磯野（平成十五年度卒）各OBが参加しました。八月末から九月に南会津でリーダー養成Wを私と末永主将、三年生三人で行いました。平成十七年度の執行部、伊藤主将と岩戸主務、リーダー三内を決めました。十月に私は監督を勇退して、奥倉コーチが監督に就任しました。長い間、ワンダーフォーゲル部活動に関わり大学関係者や部長先生、鈴木善次郎監督、手嶋監督をはじめ多くのOB諸兄に叱咤激励をいただき感謝しております。コーチ時代は鈴木監督の真摯な指導を受け、得難い経験をしました。監督拝命した時は、まず安全性の確保と危険の予知、信頼されるリーダーの育成、リーダーシップとフォロースhipの確立を目指しました。在任中は事故なく安全性が確保できたことがよかったと思います。ご声援ありがとうございました。

椎橋OBの千週

連続登山についての考察

BN 477 天野倣明（昭和三十七年商）

椎橋OBの千週連続登山は驚異的というより、常識の外にある。聞けば、そのために、冠婚葬祭はもとより、世間の付き合いは出来ない、というよりしない、そうである。

仕事も極端に制限する、いや正しくは少ししか、しないのである。お客さんからの電話も居留守を使ううち、だんだんと来なくなり、ますます自由で、連続登山に磨きがかかる。

千週連続のためには病氣にもかからない、いや病氣になっても内緒にするそうである。

ここまでのめりこむと、趣味の段階を超えて、いわば山のスーパーマン、椎橋君は今や立派なスーパースーパー人であり、山の職人さんである。

山で飯を食う、山の職人たる、たとえばボツカも今では少なく、尾瀬で見かけるくらいであるが、私は、このボツカのおじさんや、山小屋で働く昔ながらの職人さんの、少し腰を落として歩く後姿は、なんとなく風情を感じて、敬意を払い、憧れでもある。

百、二百、三百名山、百高山、各県の百山、標高二千五百Mを超える山々、全国各地の駒ヶ岳、などなど求めれば求めるほど、いくらでも山は出てくる。私たちには対象外の山へ

も行かなければならないのは椎橋職人の宿命である。

また、この他人にはどうでもいいような山ほど、標高はまずまずでも難路であり、道なき、やつかいな誰もいない山が多い。

そしてスーパースーパー仙人の「業」、「行」、「忍」の行く手には例外なく「老い」も待っている。それでも行き尽きるころまで行かねばならない、つらい道である。

椎橋稔君

千週連続登山おめでとう

BN 501 前田芳弘（昭和三十八年商）

彼とは明治大学付属中学校・高等学校からずっと一緒です。この学校に生物を教える樋山というユニークな先生がいました。教科書に頼らず実験を主とした授業を行なっていて、ある時力エルの解剖をするから捕まえてこいと言われ、誰もが躊躇する中で椎橋君が20、30匹持参して先生に大いに感謝されたのを覚えています。この頃から自然に対する興味が芽生え、植物・昆虫のエキスパートになったのではないかと思います。これだけでは偉業を成すには何か物足りないですね。

そう、彼は無類の頑固者なのです。MWWのOBが主体となつて「空色山の会」を作り会員は約三十名いますが、現在その会長をしています。会員のため運転手を務めてくれま

すが、その際つい最近までナビを使わず道路地図を頼りに運転し、同乗者の意見に決して耳を傾けずよく道を間違えます。家庭でも奥さんの云う事は「馬耳東風」と受け流しています。

もうひとつ、無類の負けず嫌いなのです。やはり山道を運転中、若いライダー風の車に追い越されると剥きになって追いかけます。この並はずれた頑固さと負けず嫌いが偉業をなした最大原因だと思っています。これからも老体に鞭うって、自らの道を進み記録を更新するのを願っています。

空色椎橋会長との最初の山行

BN 705 杉山 裕（昭和四十五年文）

私の空色山の会初山行は二〇〇〇年七月の第二十八回飯豊連峰。当時会長は中村さん（四九六）で参加者は十一名。会の母体辰巳午の会が中心メンバーで五十台後半の元気盛りでした。椎橋現会長が毎週末連続登山を始めてまだ数年だったと思いますが、いまだに続いているとは誰も思い及ばなかったことでしょう。

飯豊縦走は山中二泊、三日間共行動十一時間前後で下山後夜中には帰京という密度の濃いものでした。山中初日は切合小屋泊、団体登山とぶつかり二疊に十一人で寝ると。小屋のテントを貸すというので早速男五人は外へ。

ところが斜面で、夜中には皆入口付近に転がり集まり、小屋と同じような状態で寝ていました。二日目本山を越え花畑の縦走でしたが、事前問合せと違い残雪が多く先行パーティーの滑落行方不明事件あり、梅花皮小屋手前では強風にあおられた短パンのNさんが右の深さ二M程のクリークに姿を消したり、何人かはザックカバを飛ばされたりと話題の多い山行でした。

十一人中今も現役で山行続けているのは会長ほか数名となりました。

矢倉岳でインタビューしました

今週で連続登山は、何週目ですか

千四十五週かな、一年五十二週二十年で千四十週で、まる二十年。

今年でゆうと四十九週のワンデルングで、登った山が二百三十七山。

二百は息子と会津駒。

三百の時は、空色の会長になったので自分が行く山を選んで富士山を須走口から登った。四百が雲取山。

五百は丹沢蛭が岳で柴田先輩と諏訪本が来てくれた。

六百は原点に帰るという事で、山に登るきっかけとなった明治中学一年の生物部で蝶々を追っかけ乍ら登った霧ヶ峰、ヒュッテジャヴェルに泊まった。

七百は天城山。

八百は美ヶ原。
九百は丹沢山で俺と杉山と鈴木君の三人だけだった。

千回は二十六年十二月、皆がもう一度美ヶ原というので、王ヶ頭ホテルに泊まった。

千二百で一周するので、そこまではやろうと、頑張っていきたいと思います。

週末連続登山を始めるきっかけは

以前は晴れた日しか登らなかつたけど、空色山の会の前会長中村（好一）が花の写真の講習をやって、雨でも露に濡れた花を撮れるなどハマって、毎週登るようになった。

名山の記録は

最初に仕事から山に復活したとき、神奈川県山とか、東京都の山とか、埼玉県の山とか、雑誌を買ってやつつけてたんだよ。そのうち関東百名山があることを知って、甲信越百名山をやった時、同期で百名山をやった人がいて、対抗して、百高山、山梨百名山、群馬、栃木百名山、静岡百名山、今は信州百名山で九十八山かな。

困難はどんなことですか

やはり怪我だね

群馬百名山を狙っていて、谷川の阿能川岳、夏道がないから残雪期に行って、スノウシューで快適に歩いたというインターネットの記事をみて。

トップを歩いてたら、後で人の気配を感じて。

それいけど、スノウシューで下ったら、自分で自分の足を踏んで、でんぐり返して肩を雪に突っ込んで脱臼してザックが担げなくなつて。

しょうがないからザックをおいて、後二十分位だったから頂上へは行つて来ましたよ。

帰りに山岳会の何人かはへり呼びなさいと言ってくれたけど、みっともないのでいやだといったらみんなで分担して、下まで荷物を持つてくれて。

家まで水上から、片手で運転し、痛くてサービスエリアごと休んで、家の近くの済生会病院に行つて、やっと肩を入れてもらったけど、完全に入っていないくて、まだおかしいけどね。

ご家族は怒りませんか

怒っているだろうね。だけどそんなにはね。披露宴を二回ぐらいすっぱかした事はあるけど。

今後の目標は？

下らないけどイチローが年二百本、俺は二百山。イチローの百本が二十一年間で今年切れたんだけど、俺は百山、十七年で、それを何とか。イチローに勝。

一番怖い思いは

関東百名山の白毛門近く、宝川温泉から朝

日岳に登っている時で、上は湿地で、雨が降つて道も間違えたんだけど、すべて転んだら、スウーと体が動いて、思わず灌木に捉まって下を見たら断崖絶壁で間一髪助かった。今でも時々夢をみてうなされるよ。

あと熊に今まで三回ぐらい会つていて、大抵は向こうが逃げていくんだけど。

丹後山に一人でいった時、麓では怖いからラジオを鳴らしたり、鈴を着けたりして歩いて、尾根上になつたら笹原で、こんな処に食料もないので熊もいないだろうと、ゆっくり歩いていたら、下で吠えているんだよ。

見たら熊が立ちあがっていてね、俺もでかく見せようとウォーと叫んだら逃げて行つたよ。

なため会の皆さんへのメッセージは

今日は吉田先輩がきているけど、なんだかんだ俺が一番上で、もっと上の先輩に頑張つてほしいよ。

北アルプス・白馬・雪倉・

朝日・高山植物の宝庫を巡る

BN 775 小田野義之（昭和五十年政経）

七月二十三日夕刻、豊田駅からOGの車で出発。今回は店の売り出しがあつて参加できないMがいないので、車は四人でゆつたり座

れた。饒舌な彼がいないと静かだが、ちよつぱり寂しい。平日とあつて道の渋滞もなく、予測より早めに着き（運転手のOGは鈍足の前の車に苛立っていたが）コンビ二に寄つて、白馬村の「五竜ドライブステーション」で、ビールで軽く喉を潤してから五時間ほど仮眠できた。二時間程度しか眠れなかった者もいたそうだが、バテそうなヤツじゃないから大丈夫だろう。

二十四日 四時前に出発して蓮華温泉へ。五時半過ぎに大池方面へ歩き出す。予想通り雨模様で、白馬大池までの三時間は我慢の登りであつた。休憩する時、雨のせいか私一人を除いてザックを下ろさず、五分も休もうとしないのは頼もしいが何かうとうとし（煙草もゆっくり吸えない）。途中の天狗の庭などで早くもイブキジャコウソウなどの高山植物がたくさん顔を見せてくれたのが救いであつた。大きな岩の多い道が長く続くところを抜けると、さすがに足が上がらなくなつてきて苦しい。寄る年波か！

樹林限界を超え、広々とした白馬大池に出ると雨もやみ、気も晴れ晴れするが、稜線の先はガスがかかっている。

いよいよ稜線歩きになると「坂の上の雲」の白い道がぐねぐねと見え始めるが、おそろしく風が強い。予想以上に早く小蓮華山に到着。その先の稜線で子連れの雷鳥に遭遇、我々の注視する中、稜線を横断していった。白馬岳の最後の登りも我慢の一本だつた。少し遅

れがちのTがいて助かったくらいだった。山頂に着くといよいよ風が強く、せつかくの眺望も雲の中なので早々に山荘へ向かう。白馬山荘は空いていて、食堂も人が少ない。大雪渓が通行止めになっていたらしい。ビールを飲んで、我々だけの個室状態の部屋でひと休み。夕刻もすっきり晴れず、夕食後は早々と寝入ってしまった。

二十五日 翌朝もすっきりしない空で、白馬山頂も雲の中でひととき風が強い。三国境に下ってくるに従って晴れてきて、雪倉への稜線が素晴らしい。日差しは強くなったが、強風のために暑くはない。高山植物はさすがに種類、量とも非常に多く、私は有頂天だが、他の三人の反応は少ない。私が花の名前を教えても、フンとそっけない。もう花の名前は覚えられないしね。私は先頭をHに譲って写真を撮りまくる。

雪倉岳山頂では八十周年記念の旗とともに記念撮影。相変わらず強い風で、Hが旗を体に巻いたまま撮る。

雪倉岳を下り切った鞍部からの巻き道は木道もある湿原が何ヶ所あり、水芭蕉やリュウキンカが可愛らしい。朝日小屋へは水平道を行こうとみんなと途中で決めていたが、なんと通行禁止のロープが張ってある。明朝登る朝日岳へ今日登って下るのもシンドイの私の独断で強行突破。確かに雪渓が多く、難儀なところもあった。それよりも名前が水平のくせに上り下りがとても多く長い道で、朝

日岳へ登るのとなした差はないかもしれない。水平道が終わって合流すると、朝日小屋が目の前に迫るが、緩斜面とはいえ水平道で疲れ切った足に木道の階段がきつい。朝日平は夢のような平地で朝日小屋の女性オーナーは好感度高く、夕食も美味かった。

二十六日 三日目の朝は弁当を持って、ヘッドランプを点けて三時半出発。朝日岳から朝日を眺めようという魂胆。山頂に着くと既に空が赤みを帯びてモルゲンロートが始まっていた。長い時間、その優美な眺めを堪能してから下山に入る。朝日小屋で同室だった人の情報では雪渓が何ヶ所あり、かなり急傾斜で怖いところもあると聞いていたが、アイゼンも一度つけただけで全く問題なく通過した(先行していた単独行者はだいぶ苦労していたが……)。五輪の森に入ったあたりの展望台は素晴らしい眺めだった。五輪尾根は長くだらだらと続くが、五輪高原と称された湿原のさわやかさは見事で、キンコウカがやたら咲いていた。高度も下がってヒナタは風がないと暑苦しいが、川をふたつの立派な橋で渡り、湿原の兵馬ノ平に入ると一時間弱で蓮華温泉に到着。三日振りの湯は気持ちがいい。炭酸飲料を一気飲みして帰途に就く。しかし最後は事故渋滞に巻き込まれ散々だった。今回私が確認できた高山植物は百二〇種類だった。この広域において種類と密度では日本随一と私は疑わない。また行きたいが行けるだろうか……、疑わしい。

(情断会夏季ワンデルング)

二〇一五年十一月

草津訪問記(末代 草津白根山荘係)

BN 1017 山口直樹(昭和六十一年文)

「一九五四(昭和二十九)年に、明治大学ワンダーフォーゲル部が草津白根(群馬県)に山小屋を建設した。わが国において史上初のワンダーフォーゲル部独自の山小屋であった。在来の山岳部の山小屋とは別個に建設されたことは、大学ワンダーフォーゲル部の発展の証しを登山史の上に刻んだ画期的な事業であった。」(城島紀夫著「ワンダーフォーゲル活動のあゆみ(古今書院)より抜粋」)

顧みるに、今から三十年前の一九八五年、私は最後の草津白根山荘係に任命された折、「今まで先輩方や関係者の方々が培われた草津町の方々と絆をより深いものにして、翌年、取り壊されるまで精一杯努めさせてもらおう。」と心に誓ったことを思い出す。それにしてはあの草津白根山荘が、わが国の大学のワンダーフォーゲル部の歴史の中で、大きな存在であったことは、恥ずかしながら先日、住田先輩に薦めていただいた城島さんの著書を読むまで知らなかった。

卒業後、草津には数回訪れ、山田荘に泊めていただいたり、現役時代、スキー合宿で

コーチをしていた、だいたレストランガーデン

マスターの小林勲さんとお酒をいっしょにいただいたりしたが、二〇〇四年十二月末、妻と二歳位になった倅を連れ、スキー場で雪遊びをして、お世話になった方々へのご挨拶で草津を訪れて以来、十年以上ご無沙汰していた。前回訪れた折は、民宿山田荘を訪ね、山田宮太郎さん、文雄さん親子が、既に鬼籍入りされていることを知ったが、宮太郎さんの奥様はまだご健在で、現役時代散々お世話になったお礼を申し上げ、鈴木善次郎さんが、一九九八年に亡くなられたことをお話しすると、感慨深い表情で聴いておられた。久々に奥様とお話できて私も懐かしさと嬉しさで目頭が熱くなったのをハッキリ覚えていた。とても温和な表情をされていた。山田荘は文雄さんの妹さん一家が、切り盛りしているようで、私の現役時代、少年だった妹さんのお子さんも立派な青年に成長し、微笑みをうかべながら、居間で一緒にお話を聞いて下さっていた。レストランガーデンも訪ね、小林さんご夫妻にご挨拶した。

以来十余年、今年、創部八十周年を迎えるにあたり、草津を再訪問し草津白根山荘の建設・維持管理に甚大なご尽力をいただいた山田宮太郎さん、文雄さん親子の墓参をしようとして、夏頃に計画を立てたが、私の先代草津白根山荘係である駒場智行さんとのスケジュールが合わずに、先日十一月三日に日帰りで

やつと実現できる運びとなった。

七時二十九分大宮駅集合後、高崎駅・長野原草津口駅経由で列車とバスを利用し十一時十分草津温泉着。民宿「山田荘」を訪ねると、宮太郎さんの娘さんご夫妻がお客様をお見送りされたところで、我々を暖かく出迎えて下さった。いろいろお話を伺っているうちに、数年前に宮太郎さんの奥様が亡くなられたこと、文雄さんのご長男、政之さんも、十年位前三十年代半ば海外旅行中、パキスタンで心筋梗塞が原因で亡くなられたとのことなどを伺った。昼すぎに、娘さんご夫妻と共に山田宮太郎さんご夫妻、文雄さん、政之さんのお墓参りをし、墓前に今年、創部八十周年を迎えたことを報告した。その後、湯畑付近のそば屋、三國家さんで昼食を済ませ、十四時頃レストランガーデンを訪問した。お客様がならず、マスターご夫妻がコーヒーと手作りのリーフパイでもてなして下さり、駒場さんや私の仕事の内容などを熱心に聴いて下さった。十五時三十分 白旗の湯（湯畑隣の共同浴場）に入浴し、充分に草津温泉を堪能した。

十六時四十分 草津温泉発 長野原草津口・高崎駅経由で二十時三十五分大宮駅解散となる。

当日は、好天に恵まれ紅葉も美しかった。帰る折、草津温泉バス停に山田さんご夫妻がいらして手土産までいただく。帰りの列車の中では、駒場さんと、ハイボール片手に反省

会&小宴会をして盛り上がった。

末筆ではあるが、今後の草津町の益々の発展をお祈りすると共に、お世話になった皆様方に改めて御礼申し上げます。ありがとうございます。

WV三六会の近況報告

BN 425 長井吾一（昭和三十六年政経）

前略 梅雨の季節ですが、連日三十度を越す真夏日が続いています。諸兄お変わりなく元気にお過ごしのことと拝察申し上げます。同期の主将・主務等七名が他界した関係で同期会は十年間休会してありました。平成二十二年久し振りに小川町の紫紺館で同期会を開催し、MWV三六会と名付け、以後、平成二十四年思い出の地草津温泉、平成二十六年真鶴温泉、そして平成二十七年震災の影響を受けている（がんばっぺ）福島・高湯温泉にて開催しました。

高湯温泉旅館玉子湯の社長後藤省一はMWVに二年間在籍しており夜の宴会に同席して旧交を温めました。

我々 後期高齢者の年代になったせい、体調不良者が多く参加者は十一名でしたが、学生時代に戻って楽しい一夜を過ごすことができました。

草々

■平成二十八年 なため会ワンデリング日程

五月二十一日(土) 陣馬山一般、健脚コース
 八月二十七日(土) 谷川岳前回のリベンジ
 平成二十八年秋 針生山荘エリア一泊
 山荘三十周年にあわせて
 三ツ峠 六〇回記念、
 冬の富士の展望

濱田 稔 携帯 0801473018594

*お問い合わせ 企画振興部



写真後列左より 森 後藤 山口 佐々木 紀井 前北
 前列左より 本庄 富沢 長井 石井 小沢 岡

〔新執行部紹介〕



由水 雅也
 会計、4班PL、気象・手白小屋係チーフ
 文学部文学科
 出身地：神奈川県
 神奈川総合高等学校



永田 真帆
 主務、記録係チーフ、2班
 政治経済学部政治学科
 出身地：神奈川県
 横浜雙葉高等学校



松田 彩友美
 主将、手白小屋係チーフ、3班
 農学部農学科
 出身地：東京都
 国立高等学校



近藤 諒生
 3班 PL、針生・無線係チーフ
 農学部農学科
 出身地：神奈川県
 神奈川大学付属高等学校



今井 悠貴
 2班 PL、装備・トレーニング係チーフ
 文学部史学地理学科
 出身地：群馬県
 高崎高等学校



池田 将太
 1班 PL、情報・編集係チーフ
 理工学部情報科学科
 出身地：千葉県
 八千代松蔭高等学校



佐藤 光時
 4班 SL、衛生係チーフ
 理工学部情報科学科
 出身地：神奈川県
 桜丘高等学校



高橋 辰之介
 1班 SL、装備係チーフ
 法学部法律学科
 出身地：宮城県
 東北学院高等学校



神内 亜実
 1班 SL、針生・編集・写真係チーフ
 文学部史学地理学科
 出身地：神奈川県
 神奈川総合高等学校

平成28年度現役指導スタッフ紹介

部長…長峰 章
監督…諏訪本充弘 (751)

コーチ…井上 堅一 (1064) 尾崎 剛史 (1174)

杉山 文啓 (126) 杵澤 優子 (1258)

安田 光輝 (1264) 諏訪部貴亮 (1282)

年間行事予定

平成27年 10月 ワーク合宿 (済)

11月 秋合宿 (済)

平成28年 2月 スキー合宿

3月 春合宿

4月 新人歓迎W

5月 新人養成W

7月 初夏W

8月 正部員養成W

8月 リーダー養成W

9月 夏合宿 (地域未定)

■山小屋の利用を希望する方へ

左記の現役小屋係まで連絡願います。

○奥鬼怒山荘 (手白小屋)

松田彩友美 090-12736-18726

由水 雅也 080-3240-3011

○針生山荘 (針生小屋)

神内 亜実 090-3596-2222

近藤 諒生 080-5193-6419

■主務連絡先

永田 真帆 080-2243-3357

m.nagata905@gmail.com

■平成27年度卒業生歓送迎会のお知らせ

日時…平成28年2月27日 (土) 12:30~15:00

受付開始…12:00

会場…明治大学 紫紺館4階

会費…7,000円

訃報

BN 175 中野英敏OBが平成26年7月11日に逝去されました。

BN 750 佐竹秀城OBが平成26年7月21日に逝去されました。

BN 680 津布楽誠OBが平成26年7月23日に逝去されました。

BN 284 金子 栄OBが平成26年7月24日に逝去されました。

BN 617 折戸 晃OBが平成26年8月23日に逝去されました。

BN 257 石丸栄子OGが平成26年12月19日に逝去されました。

BN 142 小島保夫OBが平成27年1月25日に逝去されました。

BN 645 中川哲男OBが平成27年5月11日に逝去されました。

BN 382 猪野金男OBが平成27年7月30日に逝去されました。

BN 511 本郷義英OBが平成27年11月に逝去されました。

BN 602 上 哲郎OBが平成27年11月30日に逝去されました。

ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

【お詫び】

前号 (第51号) の巻頭に掲載いたしました、鈴木正彦会長による「会長就任のご挨拶」につきまして、表題を「幹事長就任のご挨拶」と誤って記載してしまいました。
鈴木会長ご本人をはじめ、関係各位にご迷惑をおかけしましたことを、謹んでお詫びいたします。

広報推進部

編集後記

BN 717 住田 孔一

創部八十周年の記念行事は四月の埼玉・日高市・物見山ワンデルンから始まった。

薫風特集号で部の歴史を調べているうち大学図書館に現存する最古の部誌 Wander Vogel 二号 (一九三九年発行) を見つけた。地下三階・校友の書架には、「六十年のあゆみ」や数冊の部誌があるので史料管理が必要だと思った。

十二月の紫紺館の祝賀会は百五十名も参加するそうで大いに盛り上がる事だろう。たまたま物見山の帰りに路端の野菜売り場で買ったサトイモも我が圃場で大きく育ち、これも楽しみだ。

発行日 平成二十七年十二月

編集 鈴木康弘 一色雅男 池上勝彦

石井克太 住田孔一 猪狩 稔

加藤章一 井上稔也 日暮浩美

発行者 明治大学体育会

ワンダーフォーゲル部なため会

印刷所 三協印刷株式会社

創部 80 周年 おめでとうございます

昭和 38 年度卒業
辰巳午の会

創部 80 周年 おめでとうございます

昭和 46 年度卒業

713 増田 康利
714 南出 進
715 小林 雪夫
716 篠 吉重

717 住田 孔一
718 安部 秀樹
719 鈴木 幸代(橋本)
720 大川 久枝(中)

創部 80 周年 おめでとうございます

昭和 49 年度卒業

749 並木 勝弥
751 諏訪本充弘
752 竹内 宏
753 小松 宏之

754 伊田 和雄
755 黒尾 良一
756 小山まさみ(中里)

創部 80 周年 おめでとうございます！



昭和53年度卒業 五三会

創部 80 周年 おめでとうございます

三協印刷株式会社

〒152-0002 東京都目黒区目黒本町5-20-7

TEL : 03-3793-5971 FAX : 03-3793-6242

E-Mail : main@sankyo-print.com

創部 80 周年 おめでとうございます。



昭和 39 年度卒業 山久会

祝 創部 80 周年
スポーツウェア工房 イワモト
岩本 雅之

〒130-0014

東京都墨田区亀沢1丁目27-9

TEL : 03-3625-3836

FAX : 03-3625-3863

携帯 : 090-3047-4044

E-Mail : daily_iwamoto@yahoo.co.jp

60年のあゆみ以降の年表

創部	西暦	元号	部長	監督	OB会長	C & M	部員数	部の変遷	社会面
61	1996	平成 8 年	長峰章	濱田 稔	新村貞男	長沢義明 尾崎剛史	32	記念館取り壊し 四大合W事故により自主休部、事故対策募金活動実施 11月 第九回OB大会箱根甲子園で開催 新田功先生部長代理就任（長峰部長イギリス研修の為）	ドジャース野茂英雄投手ノーヒットノーラン達成
62	1997	平成 9 年	長峰章	横手一男	新村貞男	本田康弘 出浦裕二	25	6 月 藤井耕一元部長死去 10月 創部60年記念式典、「60年のあゆみ」発刊 BNO683横手一男監督就任	東京アクアライン開通
63	1998	平成 10 年	長峰章	横手一男	小林碧	井上博雄 川村時生	13	2 月 鈴木善次郎元監督死去 9 月 OB会機構改革実施 9 月 明治大学リバティタワー一期工事完成	長野冬季オリンピック開催 (金5・銀1・銅4)
64	1999	平成 11 年	長峰章	横手一男	小林碧	井上博雄 川村時生	15	6 月 企画委員会第1回W(大山) 8・9 月 奥鬼怒山荘改修 MWV公式ホームページ開設	東海村核燃料工場で国内初の臨界事故
65	2000	平成 12 年	長峰章	横手一男	高野栄三	北島 健 栗田俊介	15	11月 手嶋健元監督死去	三宅島噴火で全島避難
66	2001	平成 13 年	長峰章	横手一男	高野栄三	高嶋章生 岸田彰二郎	15	6 月 坂本清元部長叙勲を祝う会	アメリカ 同時多発テロ事件
67	2002	平成 14 年	長峰章	横手一男	高野栄三	川井智詞 林 勇樹	12	5 月 BNO566松本栄作幹事長就任 10月 OB有志韓国雪岳山遠征	北朝鮮に拉致された日本人5人が帰国
68	2003	平成 15 年	長峰章	横手一男	高野栄三	磯野真一 小長谷敏行	15	10月 奥鬼怒山荘40周年記念式典	イラク戦争勃発
69	2004	平成 16 年	長峰章	横手一男	大内善一	末永正樹 生井智之	17	5 月 BNO299大内善一OB会長就任 5 月 BNO627和田満幹事長就任	新潟県中越地震
70	2005	平成 17 年	長峰章	奥倉勇一	大内善一	伊藤雅俊 岩戸里香	25	BNO588奥倉勇一監督就任	耐震強度偽装事件発生
71	2006	平成 18 年	長峰章	奥倉勇一	吉田修	川澄剛史 河野淳俊	15	3 月 卒業生歓送迎会開催 5 月 BNO717住田孔一幹事長就任 10月 針生山荘20周年記念式典（針生山荘）	ライブドア事件発生
72	2007	平成 19 年	長峰章	奥倉勇一	吉田修	渡邊 光 山上哲也	31		第一回東京マラソン開催
73	2008	平成 20 年	長峰章	奥倉勇一	柴田常夫	杉山文啓 加藤洋一	21	5 月 BNO381柴田常夫OB会長就任	世界同時不況（リーマンショック） 北京オリンピック
74	2009	平成 21 年	長峰章	諏訪本充弘	柴田常夫	吉澤悠介 水野陽子	42	BNO751諏訪本充弘監督就任	
75	2010	平成 22 年	長峰章	諏訪本充弘	柴田常夫	片貝友哉 山崎浩樹	39		小惑星探査機「はやぶさ」7年ぶり地球へ帰還
76	2011	平成 23 年	長峰章	諏訪本充弘	天野徹明	沓沢優子 大塚 覚	44	5 月 BNO477天野徹明OB会長就任 5 月 BNO775小田野義之幹事長就任	東日本大震災 東京電力福島原子力発電所事故
77	2012	平成 24 年	長峰章	諏訪本充弘	天野徹明	安田光輝 岩田卓也	32		2 月 東京スカイツリー完成 (634m) ロンドンオリンピック
78	2013	平成 25 年	長峰章	諏訪本充弘	天野徹明	南 隼人 浜口小百合	35	10月6日 奥鬼怒山荘50周年式典（奥鬼怒山荘） 12月 奥鬼怒山荘50周年記念祝賀会（リバティタワー）	アルジェリア人質拘束事件
79	2014	平成 26 年	長峰章	諏訪本充弘	天野徹明	諏訪部貴亮 鈴木優花	43	5 月 BNO728横尾廣志幹事長就任 7 月 BNO381柴田常夫元会長死去	9 月 御嶽山噴火事故 10月 ノーベル物理学賞赤崎勇・中村修二・天野浩氏受賞
80	2015	平成 27 年	長峰章	諏訪本充弘	鈴木正彦	舛田献太郎 野村啓悟	58	1 月 薫風50号発行 1 月 BNO209高野栄三元会長死去 5 月 BNO532鈴木正彦OB会長就任 8月10月 全国オールなため会ワンデルング(15プラン) 12月 創部80周年記念祝賀会（紫紺館）	3 月 北陸新幹線金沢延伸 10月 ノーベル生理学・医学賞大村智氏 物理学賞梶田隆章氏受賞